りて、清正の馬印やら、草鞋やらを解く。脚當の緒を解くとき、清正腰に付けた緋曇子の袋を坐敷へ投入れると、畏しい音がした。中には米三升許に味噌、銀錢三百文入つてある。民部驚いて、十里近く敵影もなきに、是れは又何たる事ぞといへば、清正答へて、物は大事と心得たるが善き。油斷大敵といふ事あり。我れ物具せず、身を樂にしたくは思へども、左あらんには、皆懈るべし。萬一の事あらんとき、懈つて事を仕損ずるなら、今までの武功、水の泡と消ゆべし。凡そ上を學ぶ下とて、大將寛ろげば、下は大に怠るものゆゑ、常々陣法を嚴重に致すのであると言つた。斯くまで用意周到であつたればこそ、一生何度となき戰爭に、一度の不覺も取つたことなく、朝鮮支那の果まで、鬼上官の勇名を轟かしたのである。投機の戰場で、鬼上官となるにも、矢張この心掛けが無ければならぬ。

佛蘭西のナポレオン大帝は、全歐洲を席卷した餘勢凄まじく、露國へ討

入り、モスコー府の雪攻めを喰はされて、散々不覺を取つたのが、抑もケチの付き初めで、ウオートルローの一戰に、武運全く盡き、到頭セントヘレナ流謫の客となつて、無慘の最後を遂げた。ナポレオンともあらう英雄が、露國の雪攻めに心付かなかつたといふは、餘りに迂濶の樣だが、なか〳〵左樣でなかつた。一體、ナポレオンは、敵國と開戰する前に、チャンと其兵力の多寡强弱を調査するは勿論、歩兵の歩行力までも測量して置いたといふ程であるから、露國へ攻入るに就ても、一點の手抜かりあらう筈なく、數多の氣象學者を使役して、露國の氣候を調査させ、四十年來嘗て同時期に大雪を見たことが無いといふ事實を確めて、夫れなら大丈夫と、露國へ討入つた處が、天か命か。意外にも四十年來曾て無き大雪に出逢つて、アノやうな大敗北を取つたのである。箇程まで用心に用心を重ねて、周到綿密、髪の毛一本通る隙が無いやうに、準備して掛つても、時にはカウいふ失敗を免れぬのに、相場でもして儲け

ようとする連中には、寢て居て、棚から牡丹餅の落ちて來るのを待たうといふ、至極蟲の好い横着者が多く、毎日市場へ出掛け、卷煙草燻らしながら、場面を眺め、何の思慮分別もなく、唯だ高さうだ、買つて見よう。安さうだ、賣つて見ようと抔と、不用意の商内をする。是れで儲けられるものなら、ナポレオンは、全く大馬鹿の骨頂と謂はねばならぬ。名古屋の高彦といへば、今日では不手合筋である樣子だが、一しきりは仲々全盛を鳴らしたものだ。其親父も亦一廉の相場師で、投機に關する種々の敎訓を遺して居るさうナ。其中に相場を仕掛けるに、得を取らうといふ考ではならぬ。先づ損した時、何處まで逃げられるかといふ考を付けて、遣出さねばならぬと、書いてあるとのことだ。此筆法で行けば、最初から損をした場合を見込んで居るのだから、間違つても怪我は少ない。是から割出したものか、高彦は宿屋へ泊つても、決して二階に寢ない。何故かといふと、萬一地震とか、火事とか、不意の厄難が湧き出たとき、逃場を失ふやうな恐れがあるからだとの事だ。相場にも此遺訓を遵奉して、程よく適用したならば、今頃は大した成功者となつたらうに、宿屋泊りの用意周到ばかりでは仕方がない。尤も是れは高彦に限つた譯でなく、古來の相場師に、井伊直孝、加藤清正程の心掛けで、賣買した者のあるを聞かんのは、殘念千萬の次第だ。

一生涯の機會は、其機會の存在中に利用せざるべからず

機會といふ奴は、額の處にばかり毛があつて、後頭部は赤禿げだ。ドンナ人でも、一生に一度は、此奴に出喰はすけれども、眞向正面から其額の毛を攫むことを能うせずに、擦れ違つてから、赤禿げの處へ、手を掛ける爲め、スルリと逸し去られて、折角の運を取り損ずるのである。黑田如水は、二つ物賭けの博奕の上手と自讃した程あつて、豐太閤さへ一

目置いた器量人であつたが、臨終の際、子息長政に遺言して『世間色めく時は、家中の者共、今日も相談、明日も相談と、相談ばかり催し、其中に世間引き募るものなり。何事も用捨をすれば、程がなく、物を疑ふても、際限あるものでない。尤も此二ケ條の見合ひは、鹽合が肝要ぞ。具足櫃に木履かた〳〵、草履かた〳〵入れ置き、世間事見えると等しく、是を穿きかけて出てられよ。馬に沓打つ可からず』といつたが、イザ機會が來たと見たなら、全く木履かた〳〵草履かた〳〵突懸けて、飛出す程の覺悟でなければならぬ。ソレ草鞋穿け。ヤレ馬に沓打てと、騒ぎ廻はつてる中には、例の額の毛が通り拔けてしまつて、赤禿の處を摩でる位が、關の山となるものだ。去れば古語にも

機に當つては讓ろ勿れ。虎口裡に身を横ふの概なかるべからず。

祖に會ふては祖を殺し、樓を見ては樓を打す。百尺竿頭に一歩を進むる底の勇なかるべからず。

などゝある。人間萬事、是れで無ければ、巧くノセぬものだが、取分け相場師は、一名投機者といふ程であるから、機會に投ずることが肝要である。市場で、利乘せといふのは、即ち是れだ。

凡そ古今東西の英雄、數多き中に、太閤秀吉ほど、此利乘せの上手なものはあるまい。一體秀吉は、もと〳〵人並の身分があつた譯でもなければ、親讓りの財產があつた次第でもなく、織田信長の草履取から、追々叩き上げ、三十三歲にて、ヤッと一角の將校となり、三十八歲のとき、江北二十餘萬石の大名となり、四十の坂を越してから、兎に角一人立ちで、中國毛利氏と矛を交えるまでに立身したものゝ、柴田、丹羽などの諸將に比べては、猶一二枚方も下に居たのが、本能寺の變を機會に、明智征伐の大相場を張り當て、十年經たぬ間に、天下を手に入れたのであるが、其利乘せの呼吸といつたら、何とも蚊とも形容のしようが無いほど巧い。信長が明智光秀の爲に殺されたのは、天正十六年六月二日の朝

で、其知らせの秀吉方へ屆いたのは、翌三日の夜であつた。此時秀吉は、毛利家の大軍を眼前に引受けながら、備中高松の城を水攻めの最中であつたが、其知らせを受取ると等しく、城主清水宗治に腹切らせて、咄嗟の間に、毛利と和談を整へ、翌五日朝陣拂ひして居城姫路へ引上げ、九日には又姫路を出陣して、十一日攝津尼ヶ崎に到着し、十三日山崎表へと乘込んだ。何にせよ、毛利といふ大敵を相手にして居たのであるから、斯くまで早く取つて返さうとは、誰しも思ひ設けず、明智方は勿論、柴田、瀧川、德川など織田方の諸將も、啞然として其素早さに度膽を抜かれた體であつたが、毛利和睦より光秀誅伐まで、前後十日しか掛らなかつた。其姫路出陣の前日即ち八日の朝四ッ頃、秀吉は風呂に入つたが、あがり屋に腰を掛けながら、伽の爲め、同じく風呂に入つた小姓衆に申付けて、明日打立つべき覺悟なり。天主にて一番貝吹立てたらば、飯を焚かせ、二番貝には、人夫を出せ、三番貝立つなら、印南野に於て、人

數を揃えよ、自身檢分すべしと、老臣初め物頭共へ觸出させ、直ぐに金奉行、藏奉行を同じくあがり屋へ召寄せ、まづ金奉行に、天主の金銀何程あると問ふ。銀は七百五十貫目程、金子は千枚までは無し。八百枚餘りならんと答へる。金銀一分一厘、跡へ殘すべからず、悉皆蜂須賀彦左衛門の所へやり、番頭、弓鐵砲預る物頭共を呼寄せ、知行に應じて分け取らせよと申付ける。次に藏奉行に向つて、藏々の米は何程あるかと尋ね、八萬五千石程あるべしとの答へを、聞きも畢えず。去らば今日より大晦日までの扶持米を、五層倍に算用して取らせよ。籠城の覺悟なければ、兵粮米など曾て不用なり。足輕、弓鐵砲の者の妻子は、扶持方までの賴み。煎茶でも緩々と呑むべき爲めぞ。早く〳〵と申付け。又西國への金奉行に、遣ひ殘りの金銀何程あると尋ね、銀は僅かに十貫程。金子は四百六十枚あることを確めた上、其金銀も入らざる事ながら、是れをば明日持せよ。使者飛脚などの入用、又は褒美に取らすことあらんと、

指圖終つて、風呂より上り、粥を食つたといふが、風呂の中から、軍令を發するなどは、秀吉で無ければ遣れぬ藝當である。さて粥を食つて後、傍らに居た者に向つて、此度は大博奕を打つて、御目に掛けるといつた處が、其比、名人久太郎と言はれた智慧者堀秀政は、御意の如く、世間の爲體、博奕も成目に來り、風も順風と見えれば、帆を御上げなさるべく、此方などの身上では、箇樣のとき、二つ物賭けの御分別、尤もかと存ずと挨拶し、歌よみの幽古法橋は、世間の樣子、物に譬へると、名花の櫻、唯今盛りと見える。御花見御尤もと挨拶する。最後に例の黑田如水進み出で、殿には御愁嘆の樣に見ゆれども、御底心を推量するに、目出たき事が出來るよ。博奕をも遊はされんと、御勇みの事と存ずる。幽古の申上げた通り、吉野の花も、今盛りぞや。櫻の花、寒の中に御覽なされたく思召ても、時來らねば、見られぬもの。此上は、光秀と天下分け目の御合戰なさるべし。目出たいぞや、御花見初めと覺えると、遠慮

なく挨拶したので、秀吉心中を見抜かれたと思ひけん、莞爾と打笑んだとある。實に山崎合戰は、秀吉に取つて、乘るか、外るか、二つ物賭けの大博奕であつたが、然し吉野の花も盛りの絶好機會。此期を外づしては、一生花見が出來ぬと見込んだから、金銀兵粮殘らず引つぱたいて、身上の有りたけ、張付けた大玉に甘く利が乘つて、只一擊に光秀を打滅ぼし、織田家の遺臣中、雙ぶものなき大身上となつたのである。太抵の者なら此邊で利喰ひして、玉を片付ける處だが、支那四百餘州かけて天竺南洋までも、手の平に丸め込まうといふ大膽量の相場師たけに、まだまだ上直があると、見込を付けて利乘せに掛り、信長の嫡孫三法師を護り立てゝ、柴田勝家、三七信孝と手合せをしたが、勝家の先鋒佐久間玄番、江州賤ヶ岳へ打つて出てしを聞くや否や、夫れこそ勝利手の內にありといつて、美濃大垣より江州木の本迄、十三里の處を二タ時半に駈付け、息をも繼かずに玄蕃を蹴散らし、崩れ立つたる柴田勢を追打にして、

越前北の庄へ押寄せ、勝家を攻殺した。勝家が天主に火を掛けたとき、秀吉は、前田又左工門利家と愛宕山に上りて、城を見下して居たが、天主より火の揚るを望みて、又左には、何と見られると尋ねると、利家答へて、勝家の天主に火を掛けたるは、自害したやうに見せかけ、一先づ落ちたるにてもあるべくやといふを、秀吉聞いて、勝家ほどの者が、天主に火を掛けたからには、自害に極つたり。城持つほどの者は、天主一つにても、運を開かんと存ずるものぞ。去るを天主に火かくる上は、別條あるまじ。たとへば貴殿の申す如く、一旦落延び、其後尊氏などのやうに、再度の旗上げする分別なりとも、彼の體たらくでは、二年や三年の間に、芽を吹くこと出來まじ。其内には探出されて、しばり頸に逢はん。頸を見、死體を尋ねんなどいつては、五三日暇が潰るべし、左樣の手數は、入らざる事なり。いざや加賀國へ押込まんといつて、其儘加賀へ向ひ、瞬く間に一國を平定し、次いで信孝に腹切らせて、織田家の天

下を我物にしたのであるが、ドウだ、其機會に乘悪る敏活さは、電光石火、目にも留まらぬではないか。機を見ては讓る勿れ。虎口裡に身を横ふの概なかるべからずとは。全く斯ういふ處を形容したものだ。

斯く機會の許す限り、利乘せ〳〵で買進んでも、こりやいかんと見れば、直ぐに手を收めてしまう。それが亦エライ。織田信雄、德川家康の聯合軍と、長湫にての手合せに、先手の者から早く出陣を催促して來た折、伏見にあつて、千利休の茶會に臨んで居たが、夫れを聞くと直樣、茶室を飛出し、尻を捲くつて、エイヤ〳〵と掛聲しながら、其儘出陣に及び、例によりて機會を捉むに拔目はなかつたが、敵手が家康といふ老獪であつた爲め、相塲は少し引かれ氣味であつた。勿論秀吉の身代と力量とよりすれば、多少の無理をする積なら、穴勝勝てぬ事もなかつたらうけれ共、もと〳〵天下取りの大分限者にならうといふ秀吉の事とて、ソンナ小相塲に未練を殘さず。耻を忍んで和談を整へ、相塲でいへば、莫大な

踏金を出して投げてしまつた。其遣口の敏捷で、且つ鮮かなことは、前にも後にも比類がない。太閤は實に相場道の神である。

思へば早や半昔、三十九年から四十年度の狂熱時代に、利乘せ〳〵で成上つた成金筋多く、誰は八百萬圓儲けたとか、彼れは五百萬圓位の利勘定だらうとかいつて、得意の鼻を蠢めかしたまでは好かつたが、投げる道、戰爭でいへば、退陣の法を知らなかつた爲に、一敗地に塗れて、明智光秀ならぬ三日天下で、寂滅したものが多かつたのは、誠に笑止の至りであつたが、今や我經濟界は、金利革命の時代に入り、投機者に取りては、千載一遇の機會が到來したのであるから、其機會さへ利用したなら、財界の豐太閤となる、亦敢て不可能の事ではなからう、知らず今日の市場果して太閤の如き膽智器略を有する相場師ありや否や。

忍耐して時節到來を待て。又單に何程かの利益を得ん爲に、賣買する勿れ。

ウオール街成功の第一要件は忍耐に在り。（ジエゴールド）

目先き相場は、惡るさうだ。賣つたなら十圓切取れようとか、善さゝうだ、買つたなら十圓切取れようとかいつて、小掬ひの商内をしたがるものだが、ソンナ量見を出してはならぬ。誰しも日々場へ行つて見ると、商内がしたくて、溜らなくなるものであるけれども、其仕たい商内を辛抱して、時節の到來を待ち、サア此處だといふ場合に、思ふさま飛出して、全勝を占めよ。まづ夫迄は、忍耐するがよいとの意味で、仕掛けた玉を引かれても、忍耐して時節の來るまで、放つて置けといふ次第ではない。

むかし豐太閤の伽の者に、會呂利伴內といへる滑稽者あり。或るとき、

徳川家康に向ひ、世人の福の神として敬ひ祭る大黒天の謂れを御傳授申さんとて『まづ人間といふものは、食物が無ければ、一日も生きて居ることが出來ぬ。それで大黒天は、食物の親と仰ぐ米俵を踏まへて居られる。然し食物ばかりあつても、錢財なければ、用辨が足りぬ。それで又大黒天は、金銀入れた大袋をもつて、左手に其口を括り、無用の事には、一錢も費すまいと搆えて居られる。されど愈々錢財を使はねばならぬ時には、右手に持つて居られる小槌を以て、大地を叩けば、いくらでも惜氣なく打出される。また夏冬通して、頭巾眉深かに被つて居られるのは、己れの身分忘れて、假りにも上を見まいとの用心。人間も此心掛さへあれば、長く福祿を保つことが出來るといふ心で、大黒天をば、福の神と申すので御坐る』といへば、家康頷き『貴樣のいふ處は、至極尤もである。されど貴樣は、まだ大黒天の極意を知らぬと見える。成程大黒天は、夏冬通して、何時も頭巾を被つて居られるけれども、此處が頭巾を脱かで叶はぬ時分ぞと思へば、忽ち頭巾を投げ棄てゝ、上下四方に眼を配り、毛程の抜目もなくする爲め、不斷には、被りつめて居られるぞ、是れが大黒天の極意よ』と說き示されたので、伴內も痛く感心し、太閤に此趣を話すと『今の世にも、生き大黒がある。それを貴樣は知つて居るか』との事に、伴內存せざる由返答すれば、太閤笑つて、『生き大黒とは、家康の事よ』といはれたとあるが、如何さま、家康ほど大黒天の極意を得たものは、古今絕無であらう。德川殿は、三つの大藝あり、第一に武略すぐれ、第二に思慮深く、第三に金銀多くもてりと、太閤も稱美した程の身上であるから、時のドサクサ紛れに、小掬ひをやつたなら、一ヶ國二ヶ國位を儲けることは、何でもなかつたであらうが、ソンナ氣味は、おくびにも出さず、ヂッと辛抱の手を收めて、六十餘の白髮頭になるまで、大黒頭巾を被り通し、關ヶ原合戰にソロ〳〵紐を解き初め、大阪を攻める時になつて、瓦破と頭巾を投げ棄て、全頭を露出したのであるが、

小皺の寄つた、膨ら顔の、愛くるしい好老爺と思ひの外、獰猛の眼光凄じく、唯一ひしぎに豐臣家をひしぎ倒して、天下を手に入れた。

家康のいつた大黒天の極意も、ジエゴールドのいつたウオール街成功の第一要件も、ツマリは同じ事で、忍耐の二字さへ、護身符とすれば、相場界の覇者とも、生き大黒ともなることが出來ると申すものだ。

市場の絶頂、又は最下底にある時は、手を下すこと勿れ。汝の玉は、抜き差しならぬやうになる恐れあ(ばれ)なり。

相場の名人は、頂上賣らず、底直買はずで、ソンナ場合に、手を出すと、其玉の進退が付かぬやうになる事があるから、まづは傍觀して人氣の落付くを待ち、靜かに掛引するが、上分別と申すものだ

豐臣秀吉、柴田勝家を攻め滅ぼしたる勢に乘じて、加賀國を打平げた折、前田利家より、其儘越中へ亂入し、佐々成政をも押片付くべしと勸めた處、秀吉頭を掉つて、いやとよ、信長公、甲州の勝頼と、三州長篠に於て手合せのとき、首數一萬三千餘討取られたるは、貴殿も我等も、御伴して能く存じたる事なり。其時直ぐに甲州へ押込みなさるべきかと、我も人も存じたるに、左はなくて御歸陣なされたり。是れは御利運此上なし。斯樣の時は、必ず天魔の禍あるべしとの御分別ならん。我等も柴田に打勝ちたれば、安堵これに過ぎず。何事にても勢の極るときは、危き事のあるものぞとて、其儘引返したとあるは、即ち頂上賣らず、底直買はずの意を實行したものである。勿論、古今隨一、相場道の名人ともいふべき秀吉であるから、よしんば此時、利家の勸めるまゝに、越中へ仕掛けたからとて、眞逆に玉の抜差しならぬやうな破目に陷りはしまひが、前以て用心して、手を收めた處が、猶更偉い。

常に商買に用ひ得べき若干の資源を存せよ。

是は、相場師として最も肝腎な心得だ。『米相場時代』にも、

商内は戰の備も同じこと
米商内の戰兵は金
文珠でも備の立たぬ商内は
高下の變に逢へば破るゝ

などゝいふてあるが、龜田電光は、此心懸けの至極強い人で、常に『相場は戰爭と同じで、資金は兵隊だ。如何なる名將でも、イザといふ時に、思ふ程の兵隊がなかつたなら、戰略を施すことが出來ず。ドレ程上手な相場師でも、資金の用意乏しくては、自分の見込を貫く譯に往かぬ』といつて、懷金を用意して置き、カウといふ見込の付いた場合には、直ぐ賣買を仕掛けられるやうにして居るとの事だ。

相場は、戰爭と同じだとあるから、一つ戰爭に就いて、例證を擧げると、文祿征韓の役に、我軍勢京城へ攻のらんとするとき、三奉行評議して備定めを取極め、奉行の一人石田三成、其頃隨一の智者と呼はれた小早川隆景に向ひ、斯くの通り備定めを致したが、何處にか非を打たるべき處ありやと、左も自慢らしく尋ねた。隆景見て、何とて我等の非を打ち申す事あるべき、結構なる御備定めで御坐るといふ。三成押返して、貴殿は太閤御差圖により、弓箭談合の爲め、御渡海の方であるから、御遠慮なく思召の程を承りたいとの事に、隆景、去らば存寄を申述べん。殘る處なき御備定めであるから、必定御勝利であらうが、然し勝負は時の運とやら、戰と申すものは、時により處によりて、思ひ定めた圖の外るゝことあるもので御坐る。此御備定めは、勝軍のみを土臺として割出したものであるが、自然負けることが無いとも限らねば、負軍する時の御思案ありたしと答へた。三成眼を塞き柱に凭れて居たが、やゝあつて眼を

開き、小早川殿御免候へ、先刻より不都合なる事申出てた。負けた時の思案、一つ致して見ましやうといつて、一室に退き、釜山より京城に至る傳への城々の繪圖面、及びこれに配置すべき大將、兵數等を記して、再び出て來り、隆景に示した。隆景見て、これならば大丈夫で御坐らうと、其儘坐を起つた。其處で傳への城を普請して、城主を配置したが、我軍勢一たび京城を陷れた後、餘りに深入りして敗軍したとき、傳への城まで引取つては退き、引取つては退きして、次第々々に引揚げ、終に軍を全うしたのは、隆景の謀によつたのである。尤も是れは敗軍の場合にやつた事だが、勝軍の時とても、矢張同然で、餘分の兵力がなければ、追擊戰に功を奏する譯に往かぬ。相場するに、若干の資源を存し置けといふのは、此處の道理だ。

『八木龍の卷』に難平商内の効能を述べてあるが、資源を存せよとは、言葉が違ふけれども、意は同一であるから、左に摘記する。

夫れ思惑を立て賣買をするに、中ることは十中に二三、違ふことは十に七八なり。是に依つて工夫をして、難平の一理を得たり。抑も難平の理たる、始を愼んで米を少ふし、終りを慮つて推すを强ふす。是の如きのみ。

難平の裏を云ふ時は、利乘せなり。難平は、損を防で行く者なり。又利乘せは、利を乘せて行くものなり。利を乘せて行くことは易し。損を防で行くことは難し。若し損を埋めて防ぐ能はざる時は、大損をせねばならぬことなり。

其務むべきことを務めず、其謀るべきを謀らずして、其過ちをすることは、穴を堀つて其中に自ら陷るに等し。又恐るべきを恐れず、其防ぐべきを防がずして、大に損をするものは、闇夜に提灯を持たず、長海に船を用ひす、軍陣に謀なく、只血氣の勇を恃んで行はんとするが如し。何んぞ遂る所あらんや。吾難平法は、是等の人々の不知を助け

んとするのみ。

夫れ難平をして米を遂げざるは、多く其初めより難平をする覺悟にあらずして、其負惜みに難平をするが故なり。難平をする者は、始より其心當てを致し、始め米を少しに仕掛け、其米を助くるなり。其始を少しにするは、遠きに致す所以也。

武士として、今一ト息き辛抱して戰ふ時は、敵弱つて高名すべきに、其身憶病愚者にして、逃尻搏へて、弱身を見られ、遂に敵に追ひ散らされ、後悔をすることは、十に八九はあるなり。是れ即ち金を惜しみ、心定まらざるが故なり。又難平をするものも、之れと似たり。今一ト しめくひしばつて居るならば、仕果てるものを、口惜しや、吾米を仕舞ふと、直ぐに本へ復て居る。意地の惡るい市じや。吾米をば取りに來た抔と、述懷をして止まぬ。又皆心の定まらざる咎めなり。茲を見越して、其初めに於いて心を定めて掛かるなり。

夫れ物は、動極まつて靜に歸り、靜極まつて又動く。米市も又是れに等し。夫れ旗屋が煎れる時は、其市壯にして進むものなり。然れ共賣り人が入れて仕廻ひ、其買屋が投げたる時は、商をするものは、甚だ少なきものなり。故に其本に復ること、十に八九なり。是れが難平の當り場所なり。茲で武士は高名し、コヽデ商人は益をなす。能く考へ味ふべし。又ことを遂げずして止むものは、茲迄に至らざるなり。是亦市人に限るに非ずして、萬事萬物斯の如し。

資産を起す目的を以て、ウオール街に行かば、恐らく生活費をも作り得ざらん。生活費を得る目的を以て、ウオール街に行かば、身代を起し得ん。

（エスヴイト、ホワイト）

實に名言だ。石崎政藏氏も亦嘗て相場師となるの心得を說きて『生活の

爲めの金を得るが目的ならば、相場は結構、おやりなさい。然し酒色や慾の爲ならば、相場はいけねエ、お廢しなさいだ。自分は生活の爲に、金が欲しいから相場をやる。儲けた金は是れこそ已れが生活を助けて呉れる恩人だ。アヽ添けないと先づ三拜する。ダカラ亂暴な扱方はしない。再び相場を張るにも、生活費だけは、チャンと殘して、その餘りを相場の資本にするのだが、夫れとても無暗に棄てない。時非なりと見て取つたら、直に止めて、夫迄に損した丈は、致方が無いとして、少しでも己が手に殘すやうにして行く。處が酒色の爲めとか、左なくも生活の爲めといふ感念の無い人は、得て相場にひかれるもので、さういふ人達は、兎角金の貴さを知らずに、金を欲しがるから、儲かれば、勢に乘つて益々進む。進んだ果に、的が外れりや、進んだ丈それ丈、損も大きい。損すれば、又回復しようの一念で、何處までもやつて行く。所詮は一家一門の大難義、イヤ一家一門の難義ばかりか、終には他人樣の迷惑となる。

畢竟常に頭腦を冷かにして、相場にひかれず、大玉を仕懸けぬやうに心がけて居るが、何より肝腎だ』といつたが、經驗ある人の言葉は、東西ともに期せずして一致するものだ。

ナゼ資產を起す目的で、兜町へ行けば、必ず失敗するかといふに、ツマリ儲けたい〳〵の一念あせつて、周圍の事情を調査する暇もなく、主我の欲の爲に、相場が見えなくなるからである。

葛岡翁曰く、我三昧傳を得んとすれば、迷ふに迷ひて、迷ひ拔くべし。此迷ひ拔きたる所、即ち三昧傳なり。

とある、迷ひ拔くといふのは、取りも直さず此主我の欲を棄てることだ。相場は、もと人氣の反影であるから、主我の念あつては、其見識が如何に高くとも、衆愚の人氣によつて作り出された相場に出合ふと、損をせねばならぬ。況して無識の我利々々と來ては、到底お話になつたものでない。素人が始めて相場を仕掛ける時は、屹度儲かる。其儲けが病み付

きとなつて、遂に身上を潰した例は、いくらもあるが、能く其間の消息を味つて見ると、眞理が含まれて居る。トいふのは、素人が始めて相場に手を出すには、千思萬考の結句、五十圓なり百圓なり、原資を棄てる氣で掛る。此棄てる氣が、既に無慾であるから、其判斷が適中する。さて適中して、何程か利益の味を占めると、相場は譯もなく面白いものゝやうに思はれて欲心が出て、今度は棄てる氣でなく、十分取る積りで仕掛ける。其處でアベコベに取られてしまふのである。大資産を起す目的で、ウォール街に行けば、屹度損をするといふは、此處の事だ。生活費を取る積りで、相場をやれば、身代を起すとあるは、前と反對で、何事も愼重に考へて、儲けるよりも、寧ろ損をせぬ用心怠らず、萬事手堅く商内すると、それが積り積つて大資本家となる。兜町で成功した連中で、最も多いのが、鞘取を目的として商内した人々である。鞘取の利益は、至つて少ないやうであるけれども、懷が一文も減らずに、夜が明けると、何程かになる。加賀榮三郎とて、大阪から來て仲買した人などは、此鞘取商内で、遂に百萬圓餘も稼ぎ溜め、銀行迄造つた。今の福島でも、小池でも、其營業振りは、何れも鞘取的である。神田鐳藏氏の成功も、初めは生活費を取る目的で、土壤を讓らず的にやり、それにより て泰山の大を成したのである。『八木龍の卷』に曰く

（問）我聞く、相場ことをするものは、十人が九人迄損をして退き、只一人のみ益して退き、其一人も亦彼の九人の中なりと。其理如何。

（答）大抵似たり、何故に損人多きや、曰く、其心中例へば一兩の資本でも百兩迄にせんと思ひ、欲深にするが故に、少々掬ひ殖めても、此の目腐金何んの足しにもならぬ抔思ひ、尙々氣高振りになつて、米を增仕掛けするが故に、遂には一文なしになつて止むものなり。又商内の仕樣を知らず、浮からとして、茲でも踏み、其處でも踏み、何んで損をしたことやら、何んで踏んだことやら、無

茶羅九茶羅で、其上強いこと負惜みを云ふて後悔する。右九人の部なり。夫れ何が故に狼狽するや。眞實を外にして外事に迷ひ、積り方を知らずして法を立つことをせず。早く取りたぐらんとせしが故なり。夫れ積り方をつゝまやかにして、其法立を精しくし、心を靜めて慮りをよくし、損を覺悟して行ふ時は、當らずと雖も遠からじ。夫れ斯の如きものは、十人の其一人なり。嗚呼心を用ゐるものゝ勘きことや。人皆損すれ共、其損する所以を知らず。過てども、其過ちの基を知らず。人皆益を欲すれども、其益する所以を知らず。所謂喰ふて其味を知らざるなり。悲哉。

これとホワイト氏の言葉とを合せ味ふたなら、相塲上の三昧に悟入することが出來よう。

人皆賣る時は買へ。皆買ふ時は賣れ（ロスチャイルド）

一切の事情、最も悲觀なる時、若くは他人皆賣らんとする時は買へ。

兩語共意味は一つで、本邦でも、同樣の事が言はれて居る。『金泉錄』には

萬人が萬人ながら弱氣なら
　上るべき理を含む米なり
千人が千人ながら強氣なら
　下るべき理を含む米なり

とあり。本間宗久翁も亦

米も弱く、人氣も弱く、我も賣りたき時は、心を轉じて買方に廻るべく、又米も強く、人氣も強く、我も亦買たき時は、極めて天井なるも

のなれば、心を轉じて賣るべし。

人西に走る頃、東に走れば、極めて利運なり。然るを人の戻る頃、遲れ馳せに、西に走りては、何時も利を得難し。

といつて居る。其他『相場は、人氣の裏に動く』とか『モーはマダなり、マダはモーなり』とかいふ語は、何れもロスチャイルド氏の語に符合して居る。原則としては、萬古動かす可からざるものであるが、サテこれを實地に適用することは、なか〳〵六ケしい。

德川幕府の季、外交問題開始と共に、尊攘熱沸騰し、安政戊午の大獄より、大和石見の義擧、元治甲子の長人犯闕事件と、追々にせり詰め、到頭討幕密勅の降下といふ天井まで打たうとして、薩長の勤王黨は勿論、幕府方の人々も、砲火の爭は得逃れぬものと、觀念の鼻息荒くなつた途端に、十五代將軍慶喜公が、思ひも掛けぬ、大政奉還の快擧に出でたのは、即ち千人が千人ながら强氣のとき、心を轉じて賣つたも同然。天晴

れ相場道の三昧を得た仕打であつた。斯程の人も、一旦大阪へ退いてから、主戰の人氣に釣込まれて、鳥羽伏見に、砲火の買と出掛け、到頭散々の敗北して、一時逆賊の名までも取られた處を觀ると、人氣の裏を行くといふ事は、なか〳〵やり切れるもので無いといふ活證を得られる。

其處になると、勝海舟は流石にエラかつた、慶喜公は、大阪より江戸へ逃げ歸られる。追討の官軍は、トコトンヤレの節勇ましく、三道より攻め下る。味方と頼む旗下には、戰爭熱高く、何れも狂氣の如く騷ぎ廻る中に立ちて、海舟獨り恭順一途と、所存の臍を堅め、而かも官軍、江戸城へ攻寄せ、城中の人々、必死を覺悟した上でなければ、此恭順策を貫徹する事叶はずといつて、味方からは、主家を賣る奸賊よと罵られ、薩長の犬よと嘲られて、間がな隙がな付狙はれても、一向に驚かず。官軍已に箱根の險を越えて、先鋒川崎近くに押寄せ、德川家の陸海軍士官を初め、逸り立つたる旗下の壯士共は、これに應戰せんものと、殺氣天を

衝かんばかりであつても、更に頓着する氣色なく、ヂッと怺えて、機勢の熟するを待受け、扨三道の官軍、江戸へ押寄せ、明日はいよ〳〵總攻擊といふ觸廻しで、一夜明くれば、府下百萬の生靈、アワヤ焦土に化せんとする危機一髮の場合に、電光石火、素早く老西郷を抱込んで、談笑の間に、主家恭順の願意を貫き、江戸城の受渡を濟した。斯くいへば。海舟は一から十まで、官軍に頭を下げ通した意氣地無しのやうであるが、なか〳〵左樣でない。萬一官軍に於て、恭順の願意聞入れず、理が非でも、戰爭するといふなら、此方に於ても、快よく最後の一戰しようと、それ〳〵の準備をなし、官軍の市内に入込むを待ち、八方より火を掛けて、其後を斷ちきり、焦熱地獄の責苦を見せて呉れんの畫策殘る處なく、人氣を戰爭の極頂にせり詰めて置いて、ポンと其裏を行つたのであるが、其呼吸に何とも言ふに言はれぬ味がある。アワレ相場界の海舟は、何人であらうか。兜町に出入する程の人で、『金泉錄』の歌位は、聞き覺えに覺えて居ぬ者がなからうが、それを實行し得たものは、タンとあるまい。

公衆は、常に頂上に買ひ、最下底に賣る。

來客筋は、常に一番高くなつた處を飛付いて買ひたがり、一番安い所を賣りたがることは、西洋でも日本でも同じことゝ見へる。市場で、目先きの相場を判斷する定規に、君客は今ドウして居るか、總買ひだよといふと、サウ買つて來たら、モー上げも止まりはせぬかなどと、アベコベに賣物を注ぐことは、屢ある實例だ。一體、仲買は客の注文を受けても、悉皆之を場に出し切れぬ場合が多いから、心ならずも客に向ひ勝ちとなるものであるから、客總買ひである、夫れでは相場は安からうと云ふと、ナンダカ客殺し策でも講ずるやうで、薄情に聞えるが、決してサウでない。人氣の思ひ詰め張り詰た處を云ひ現はしたものである。黑人筋は、相場をするのが商賣であるから、苟も相場の變動に關係ある事情なら、

費用を惜まずに調査してから商内をするが、公衆卽ち來客筋に至つては、必しもサウは行かない。素人は、相場するのが職業でないから、平素餘り相場の變動抔には注意して居らぬ、處が財界が景氣付いて、株式の恢復時期になると、株で儲けた話が追々高くなつて、何の某は株式で大當りたげナ。少なくも數十萬圓を利得した鹽梅だ。一兩年前迄は千圓の金にも困まつて居たものが、儲けるのも損するのも株式だ。何と一度自分達も試みて見やうではないかとの相談は、幾度かあつても、根が相場を危險のものと信じて居るから、容易に手を出さぬ。夫が追々近所の木兵衛田吾作迄も儲けたと云ふ話になつて來ると、其人の人格も能力も、決して自分達の上に居らぬものすら儲け得らるゝならば、自分も儲け得られぬ筈がないと、我慢をして辛抱に辛抱を重ねた揚句、愈我慢し切れなくなつて、始て手出をする時が、人氣の沸騰點、卽ち狂熱の極度であるから、頂上を買つたり、底直を賣つたりすることになるのだ。公衆の總

てが醉ふて來た時が、何時でも相場の御仕舞である。

市價は、必ず頂上に於て、最も强さうに見え、底直に於て、最も弱さうに見ゆ。

前句の裏を見せたもので、最も强さうに見えるから、來客も買ふ氣になり、弱さうに見えるから、賣る氣になる。

萬人が呆れ果てたる直が出れば
それが高下の境なりけり

何日とても買ひ落城の弱峠
恐い處を買ふが極意ぞ

何日とても賣り落城の高峠
恐い處を賣るが極意ぞ

も同じ意味である。『商家秘錄』に、天井底に就いて論じて曰く、

總じて投機する人の習として、下り詰めたる處にては、弱材料を言ひ過ごし、上り詰めたる處にては、強材料のみを言ひ盡すを常とせり。諸人斯樣に、高きとか安きとか、人氣の片寄りたるとき、天井にてもあらんか、底にてもあらんか、心を注くべし。然れども高き時には、皆其氣に呢みて、人々の言葉に移り、目先に迷ふものなり。此時、大丈夫の勇猛決定の心を發し、一心顚倒なく、勘辨工夫を凝らすべきことなり。志丈夫ならざれば、一旦高下の利を考へて、思惑を立つると雖も、又中途にて挫折して手を出さず、或は人と相談して迷を起し、折角の思惑を亂し、終に出遲れとなり、後にて相場思惑通りに來ると き、後悔する類多し。天井底などは、一年に二度か三度ならではなきことなれば、其圖を外づして、又再び其機會は得難き事なり。一生に今一度なき處と思ひ、其節の考へ肝要也。見込極りたるときは、人に謀らず、我も二度思慮を加へず、速かに商内すべし。もし其商誤らならば、速かに改むべし。能く思ひ計つて、善と思込みたる時は、何事にも迷ふ可からず。油斷すべからず。今日見込付きたる相場も、早や明日は、多少にても思惑通り高下する時には、出後れて迷ひと也、終に手を出さず、後悔すると多きもの也。よく〳〵考ふべきことにこそ。是は天井底に處する心得を說いたものであるが、何れにも十二分の注意を要すべきことである。

人が汝に暗示を與ふる時、直ちに爲す勿れ。時を與へて善く考へ、又十分に事情を明かにして、而る後に爲せ。

此句は輕擧妄動を戒めたのである。人がドノ株が善いとか惡いとか、氣付きをして呉れたからとて、オイソレと乘つて商内してはならぬ。買ふべき時節か、賣るべき時節かを、よく〳〵考へて、十分に四圍の事情を

明かにした上で、實行せよと云ふのだ。早い話が大日本精製糖株などがソウで、配當はよし、精糖業は殆んど内地で專賣のやうであるから、一見甚だ確實なやうにある。而かも重役は砂糖株より外に、好い株がないやうに吹聽して說き廻はつた。其話に乘つて、即ち暗示に依て、買付けた人は多かつた。處で其會社の内部がドウであつたかと云ふと、丸で借金して其金を配當して居つたのだから、一朝内部が曝露さるゝに及んで、其株式は殆んど三分の一に下落して、所有者に莫大の損失を與へたやうな事實がある。去れば徒らに人が忠實振つて、ドノ株を買への賣れのと云つたからとて、容易に手出しすべき筈のものでない。

拗執は、益を受くること稀なり。

執拗で好いことは一ッもないが、殊に相場に意地を出して商内をすれば、萬に一つ意地の通ることもあらうけれども、是れは至つて少ない、多くは損をすると云ふことで、誰れにも判つて居る話したが、之を實地に試めして見ると、素人は相場に意地を付けて失敗するが多い。或る株を買つたとすると、其株が五圓なり七圓なり引かれゝば、自分の見込みが間違つたのであるから、其際何とか別に工夫をすればよいに、何處までも意地を通さんとして、七圓下げを買ひ、十圓下げを買つて下げらるゝから、忽ちにして資產を破るのである。松辰氏の如きも、四十二年九月期の米に餘計な意地を付けなかつたならば、アンナ見苦しい失敗もなかつたであらう。其他、此種の例は枚擧に遑あらずだが、兎にかく意地商内は大損の基たることを、會得して置きさへすればよい。拙著『投機新論』中に左の一項がある。

阿部の相場風

阿部が思惑師中でも立派な思惑師であることは、茲に改めて云ふ迄もなく、世に大人と稱すべき人があるならば、確かに阿部は其一員であ

る。其人となりと云はうなら、溫厚にして恭謙、勤勉にして力行、物に撓まず、事に屈せず、深沈にして大度ありだ。相場師に最も必要なる自信力に富み、品行方正にして信用を重んずる、寡言にして一事一物を苟もせざる、孜々營々として寸陰を空ふせざる、總て斯る點に於ける阿部は、確かに商人の摸範とするに足るべき資格を備へて居る。百五七十億萬圓の國家を支配して居る政府の役人が、總掛りて、タッタ五千萬圓の外資をすら輸入することが出來ないと云ふ失先き、阿部は一通の電信にて、數十萬石の外國米でも雜貨でも約定する丈けの手腕と信用とを持つて居る。コンな人が數十乃至數百人もあつたなら、日本もコンなに貧乏して居るまいものを。工業もモット起つたらうし商業も隆かんになるだらうと思ふ位だが、情けないことには、世を擧げて滔々輕躁の奴等許りだ。後進の士は、宜しく阿部に鑑みるべきだが、然し是程立派な人でも、其相場風と來ては、下手の横好きで、チ

ットモ則るに足らない。ナル程阿部も、多年相場道で苦勞した丈けあつて、充分相場を大きく見る質だが、餘り大きく見過ぎる加減が、折節は之れが爲めに意外の失敗を招く。窮鳥懷ろに入れば、獵夫も尙ほ之れを殺さずとやらいふが、阿部は對手が降伏して來ても容易に許さない。敵の崩れ立つたのを見れば、長驅して追窮し、殆んど陣を立て直すに暇まなからしむることは、大に必要であらうけれども、既に降伏して來たならば、ナンにも論はないのだから、之れを殺さうとするにも及ぶまい。處が阿部は殺すばかりか、トヾメ迄刺さなければ熄まぬ風がある。手近かの例をいはうなら、二十四年の買占めでも、相仙の降を入れずして、却つて志摩松澤等の突擊で、ヒドイ目に遇ふて居る。三十二年の外國米でもソウだ。利益があるから、好い加減の處で賣れば好いのに、賣り損なつて、終には意外な損をして居る。與ふるは取るなりと云ふことは、阿部の相場風にはチットモない。引かれ腰

に弱かるべしとは、古來相場道の格言である。見切りを早くすることは、所謂過ちを改むるに吝ならぬと同じく、肝要なことだ。然るに阿部の商内振は、多くは難平商内だ。當初から大思惑を立てゝ、商内仕掛けたとは、殆んど幾度と數へる位であらう。彼れは當初五百枚か千枚かを仕掛けて、利益があると喰つて居ることが多い。ソレが偶々引かれると、買へ買へで大に買ひ込む。或る人が話したことがある。阿部が買方で大玉を仕入れて、相場の意の如くならぬ時に、注文を聽きに行つたら、阿部は直段を聽いてから、暫らく考へて居つて、無數に買ひ取ると云はれたので、何心なく玉數を問ひ返したら、大立腹で、好いではありまへんか。買ひなはれつたら、買ひなはれ。出來る丈け遣りなはれと云はれたさうな。けなり買ひ、立腹賣りは、禁制とか何んとか云ふことがあるが、阿部の商内は、確かにこの方則にも背いて居る。難平商内に就ても、凡そ資金に充分の餘裕があるほどならば、ナ

ニも好んで相場を試むる程のことはないやうなもので、僅かの元資を以て、澤山の報酬を得やうとするからこそ、相場をするのだが、阿部流の遣口では、到底大失敗を招くから、返す返すも注意せねばならぬ。何故失敗を招くかと云ふに、金は謂はゞ相場の駈引では、兵隊のやうなものだ。兵隊を多く持つて戰さをするより好いことはないのだが、兵隊許りではいかぬ。戰術が肝要であると同じことで、相場の掛け引も、一定の戰術がなくては、如何に巨額の資金を持つたからとて、十が十迄甘く行くものではない。昔は自已に資金さへあれば、少し位見込が違はうが、ドウしやうが、隨分腕力で敵を殺すことも出來たであらうが、今日では中々ソンなことは許さない。何人でも見込みさへ充分に附ければ、銀行を利用して資金を融通することも出來る。割高の場所へは、割安の地から品物を持つて來て渡す。自已に渡す力がなければ、他人が渡して呉れる、ソーなつて來ると、引かれ腰が強

いなどゝ威張つて居る譯に行かない。無理をすればする丈け、叩かれるから、如何に阿部でも、到底之れに打勝つことが出來るものでない。阿部の儲けたのは、前にも云つた通りの不便の時代に、船を持つて北國で買つたり、九州で買つたりして、大坂へ持つて來て、利益を占めたので、此時分には現金があつて買つてさへ來れば、必らず利益があつたのだが、今日では、交通が開けて、生產地と消費地との相場に鞘開きが少ないから、以前のやうな利益は見られぬ。阿部の近年損續きなのは、必竟は商業の變遷に伴つて、商內の仕方を變化しない爲めではあるまいか。兎にも角にも阿部の相場風は、阿部にして始めて爲すべしで、後進の則るべき點は至つて少ない。

決して「ストライキ」の爲めに株を賣る勿れ（アヤスン、カマツク）

何れの會社に同盟罷工が、起つたからとて、其罷工を看に會社の株券を

賣ると云ふは、戒むべきことだとある。これは如何にもサウだ。「ストライキ」は、ホンの一時的のもので、傭主と相談が付けば、何時でも復業するもので、會社事業の盛衰に關係がないから、斯ることを看に賣ると、屹度損をする。不時に向へと云ふ言葉があるが、恰も對である。

總て有價證券は、急激の變動、若しくは恐慌の時期中は、其實價以內に買ひ得らるゝを常とす。

恐慌の場合とか、乃至或る不時の事件が起きて、市場が大慌てに慌てる時は、其株式が定價以內に落つるは、東西何れの國でも免れぬことである。三十七八年戰役前であつた、今日では隱居株で餘り商內もないが、當時花形株であつた郵船株が、五十七圓に低落した。又三十五年の敕令第百五十八號で、限月短縮の發布があつた時に、東株が一ト場で五十圓餘も暴落して、當切りは九十一圓の安値を示したこともあるが、これは所

謂急激の變で、實價以内に低落した例である。恐慌當時の相場が、如何に實價以内に趨るか。又資産家乃至思惑者として、其相場に買取りて、ドウ云ふ利益が得られたかは、四十一年五月と今四十三年二月との市價を比較して見ると直ぐ判かる。

	四十一年五月二日	四十三年二月十九日	比較
東京鐵道株	五四、二〇圓	七三、三五圓	高 一九、一五圓
日本郵船株	七七、〇五	九六、九五	高 一九、九〇
富士瓦斯紡績株	六六、〇五	一〇八、〇五	高 四二、〇〇
鐘ヶ淵紡績株	六七、八五	一一三、〇五	高 四五、二〇
東京株式取引所株	九三、〇〇	二三〇、〇〇	高 一三七、〇〇
東京株式取引所新株	五一、八〇	一六一、〇〇	高 一〇九、二〇

株券は賣り放つ迄、利益を得たりと云ふべからず。

株持筋としては、如何にも此心掛けが肝要である。或る株券を所有して居て、其株式が二十圓も三十圓も高くなると、夫れ丈け自已の身上が殖へた樣に心得て、急に心が大きくなり、吾輩の身代は五十萬圓になつたとか、百萬圓出來たとかいつて、丙祝ひなどした向きが、成金の全盛時代には、隨分多かつた。是れは自分の株式を賣り放つ迄、利益を得たのでないと云ふ事に、氣付かなつたからであつて、一朝人氣が行き當つて、瓦落相場を演ずるや、曩に百萬圓を計上した資産は、何日の間にか消へて仕舞ふて、勘定して見ると、頭金の不足丈けが借金になつたと云ふやうな例は、誠に少なからぬのである。其處で三菱家などの資産の計算法では、決して時價を見積らぬ。買入れ直段で評定してあるから、市價の高下の爲めに、資産に增減を來たす樣な事はしない。即ち實價を主として居る。之れが眞正の評定法であるのにも係らず、堂々たる大會社の重役などが、公債が五圓高くなれば、忽ち其差を時價の所有公債に見て、純益として大いに儲かつたかの如く粧ひ、株主に配當を多くしてやつて、一時の糠喜びをさせ、己れの賞與金を多く取るなど云ふ連中は、隨分世

間に尠なくない樣だ。コンナことでは、トテモ其事業の安全確實は希圖せられぬ。自分の所有した株券を賣放つ迄、利益を得たと思ふなどいふは、此處の道理だが、市場に出入する連中抔は、自分の仕掛けた玉に利が乘れば、其値違いを素露盤で彈いて見て、僕は五萬儲かつたの、十萬儲かつたのと誇つて居る。焉んぞ知らんやだ、此頃の樣に、東新のヂキが八圓も九圓も浮動する場合に在つては、千枚商內して八千圓儲かつて、マないゝと喜んで家に歸り、妻君を相手に得意滿面で、晩酌を試み、いゝ心持になつて寢に就き、翌朝場へ行つて見ると、忽ちにして暴落、折角取れたと思つた八千圓は、一夜の惡夢と化して、却つて其日の勘定の差を、自分の懐から支拂はなければならぬことになつて居る。初めから慾でする仕事だから、利が乘れば直ぐに得と思ひ、一二圓も引かれると、三四日經てば十圓高がある相場と思つても、損した氣になつて、口斗り大きなこと吹き立てゝも、心で競々たる連中ばかりだ。

內密に買へよ、而して賣りは、公然たるを妨げず。

本邦には餘り必要がないかの樣に思はれる。亞米利加の如き大相場があつて、一ッの大仕事を仕樣とするには、其仕事をする前に、人に知られると、提灯が付いて目的を達することが出來ないから、何事も秘密にしなければならぬ。而して此を利喰するは、公然乘り出して差支へないとであらうが、本邦で云へば、內密で買ふ必要があれば、賣るにも亦內密にするを可とする樣にもある。是れは双方商內の仕方や、商習慣が違ふ處であらう。

明日も、此處に市場あるべし。

『急がず。騷がず。待つが仁なり』

と云ふやうな意味で、宗久翁も、

『商內は急ぐへからず。急ぐ時は陷み出し易し』

又商家秘錄にも、

『大立身は急がず時を待つを心となし、己れが分限相應、氣の痛みにならざるやうに心掛くべし』

とあり。俚諺の、

『急がば廻はれ』

豹の卷に、

『內證に義理ある借金などある人、何月何日迄に儲けねばならぬと性急に商內する人あれど、是れ戒むべきなり。十分練りに練りて、時節を待ちてさへ勝利が得がたきに、斯の如き商內、豈に勝利を得べけんや』

とある。何れも機會の到來して、之を捕捉する迄は、容易に手を出さぬが好いと云ふことになるのである。

市價高き時、一段の騰貴を見込むには　株式の所得增加し、若しくは一般の狀態改良に向ふことを豫測し得べき、確實なる理由なかるべからず。

株式の市價が自分の見込んだ通り高くなつた場合に、尙一段の騰貴を見込には、株劵の所得が增すとか、一般の狀態に變化するとかいふ、確實なる理由がなくてはならぬ。夫を確めもせず、賣買に着手してはならぬといふことで、約めて言へば、二度の思惑を立てるには、思惑する材料に就いて、十分に研究した上でなければ、着手するなと云ふことになる。普通何んでもないやうことのやうだが、大抵の人は、氣配に釣り込まれて、知らず識らず二度も三度も思惑をするやうになる。狂熱相場時代（四十年）にあつても、其通りて、自分のみは其熱に犯されまいと思つて居らぬ者はなかつた。然し酒を飲む人が、當初より醉狂しやうとて飲む人

の無いと同じ事で、一杯目には人酒を飲み、二杯目には酒酒を飲み、三杯目には酒人を飲むとやら、醉ふたと云ふ人に、實際泥醉者はなく、醉つては居らぬと威張る時が怪いのだ。相場も熱氣味だ、素呂盤の桁外れまで買はれたと云ふ時は、まだ熱でない。相場は若い、愈々是れからだと云ふ時が、ゾロ〳〵險呑なのである。三十九年から四十年へ掛けての東株相場に就いても、大抵の强氣は、四百圓位を豫想し、夫れから四百圓の相場を見ると、五百圓が豫想され、六百圓が豫想され、七百圓乃至千圓と高値々々を豫想されたが、一般經濟狀態の變化が、十分に認められたかと云ふと、決してサウ云ふ次第では無かつたのであるから、一朝行き當ると、又收拾すべからざるに至つたのである。二度の思惑は、實に愼しむべきことである。

徳川家康、豐臣秀吉と、小牧山合戰のとき、秀吉その先手たる池田勝入、森武藏守討たれて、味方惣崩れとなつたと聞き、犬山より息卷きて出陣し、もし徳川勢、今十町も追進んだなら、新手の大軍にて出合ひ、只一揉みに揉み散らさんものと、龍泉寺の山の上に、金の瓢簞の馬印を推立てたるを、家康望み見て、筑前頼み切つたる先手を二人迄討たせ、嘸ゼたるならんといふ。榊原康政進み出て、仰せの如く、如何にもセギたると見えて、馬廻りばかりにて馳せ來りたると見受け候。今ぞ彼れを討取るべき機會なれといへば、家康莞爾と打笑み、勝は重ねぬものぞ。一刻も早く引取れとて、渡邊守綱を殿として、小幡へ引取り、其夜更に小牧へ歸陣した。家康が秀吉を相手取つて開戰したのは、もと〳〵織田信雄を助けて、義理堅いといふ美名を收めようとしたので、一度さへ巧く勝てば、それで極の上々吉。立場からいつても、勢力からいつても、秀吉を打挫きて、最後の勝利まで收めようとは、當初より思惑して居らなかつた。其處で、一ト勝利あると直樣、小牧へ引上げたので、勝は重ねぬものぞといつたのは、即ち二度の思惑せぬものといふと同じ事。戰爭

も相場も、全く一理だ。

然し相場道に於ては、唯たに二度の思惑を禁制したばかりでなく。古來の經驗で見ると、少し市場の注目を惹くやうな商内する程の者で、是まで賣方として立つて來ながら、利喰ひして直ちに買直すとか、又は或る程度まで上ると、忽ち賣越すとかいふ、商内をして成功したものが、一人も無いと迄言つて居るものがある。何樣强氣として見込を立て、自分の見込通りになつたとき、利喰ひしたならば、徐かに熟考して、夫れ以上、高下すべき各種の事情を研究し、確かと合點が行つてから、初めて手を下すがよい。買ひで利を得た一瞬間に、强氣が弱氣になるといふ樣な事で、成功しようとしたからとて、神ならぬ人間には、到底出來るものでない。

飛ぶ前に先づ四邊を見よ。然れ共動く事なきものは、決して造ることなし。

相場を仕掛る前に、愼重に經濟界の狀勢、乃至商内しようと思ふ株式の事情などを調べて、ソウして手を下すが宜い。輕忽な商内はするな。併し愼重にせよと云ふ迄で、考へ込んでばかり居つて、仕掛けなければ、到底一物をも造り出すことが出來ない。昔水を泳げる迄は、水に行かずと云ふ人があつたと云ふが、相場が危險だからとて、相場を充分に知る迄は、相場しないでは、遂には一物をも、相場から得られる譯がないとの意味である。

株券を買ふに當つては、其收益力即ち實價が市價以上にあるものを撰べ。

收益力の强いものと云へば、詰り割安のものを撰んで買ひ取ることに歸

着するのであるが、併し株券を撰擇するに當りて、注意すべきことは、安物買ひの鼻落しである。市價が割安であるのには、自から低落すべき事情が伏在して居るから、思慮分別して乘出さねばならぬ。一番早分りする例は、今春來の上げ相場で、炭礦を買つた人は、割安株に違いないが、一文も儲け得なかつた。或は損を仕たかも知れない。處で割高の東株を買つた人に損したものはない。味ふべきことだ。

割安物の非常に好きな人は、加東德三氏であつた。故今村氏と共に、關西や炭礦株で大儲けして、銀行迄起すやうになつた迄はよいが、米人の誰かの話しに、大資産家になるには、人の遣り切れなくなつて、捨てた仕事を整理して、ものにしなければいけないと聞て、先生遽かに大事業大資本家になる積りになつて、今では影も形もない水産株を引受けた。房總鐵道株にも力を入れた。而して金邊鐵道にも放資した。砂糖會社へも手を付けた。處が其株券は、世の中が惡くなりかけると、融通は付か

ず、事業の整理は益々困難となつて、此種の惡株と共に、自己の資産までも蘆盡した。之れに反して、若尾逸平翁の如きは、初から着眼點が違つて居つて、株式を持つなら割の高い株に限る。割高を買はれると云ふは、事業の性質、乃至將來の大發展を來すべき見込がある株だから、之れに放資するに當つて、割が高いやうであるが、一年過ぎ、五年過ぎ、十年過ぎて見ると、非常な割安な物になつて居る。自身が經營の任に當つたからとて、數多の仕事が、到底完全に成し得るものでない。自身が經營し切れないのならば、信ずべき人の經營して居る會社の株を、割高であつても買つて置くのは、世間から保證付きの物を所有して居るのだと云つて、自家の資産を日本銀行、正金銀行等に投じ、特に今日の東鐵の先祖であつた馬車株へ放資した。其理由が面白い。帝都は次第に發達する、其帝都の眞中に敷かれてある鐵道だから、將來有望のものであることは云ふ迄もない。夫れに乘り賃が安いから、景氣でも乘人が殖れば、

不景氣でも人力車抔に乘るよりか、馬車に乘る方が利益だから、收益が減少しないと云つて、買出したのが、日清戰爭の始めで、支那に戰爭して負けたとて、帝都がドウなるものか。況んや負ける氣遣ひのない戰さだ。國と資産を賭するに、何の遺憾があらうぞとて、六七十圓臺の株を買つたのが、其後增株などの爲めに、三四百圓に騰貴して、巨萬の財産を作つたのである。割安株を買ふよりか、割高株を買ふ方が、有望であるの例は歷々である。

小なるも屢々すれば、金囊を滿たす。

どうせ儲けるなら、大相場で、四十圓切も五十圓切も取らねば、話にならぬ。小相場などを掬つて見たつて、何になるものかと、能く人はいふが。然し塵も積れば山とやら、小相場を掬つて、上げに取り、下げに取るといふ鹽梅にしても、其れが積れば、巨額の富となるものだ。今では新宿將軍でなくて、全敗將軍となつて居るが、濱野茂氏は全盛時代に、白銅將軍と異名された。何故かと云ふに、利さへあれば、五錢切でも透かさず喰つて仕舞ふ商內の仕方を嘲けつたのであつたが、實際濱野氏は、白銅的に商內して、三四十萬圓の資産を作つた。尤も此白銅的の商內も、當人に聞くと、萬更理由がない譯でもない。如何に丈夫に建築した家屋でも大風の時には、風當りが强い。之を防ぐ爲めに、垣の必要がある。相場も亦其通りで、高いなり安いなり自分が見込を立てゝ、千枚を仕掛るとして、五百枚だけは自分の豫想した直段が出る迄は、少しも動かさずに立てゝ置いて、殘り五百枚を、五錢切りでも十錢口でも利喰して相場の綾を取つて行くと、元と立てた五百枚の玉が十圓で買つたものならば、利喰が加はつて行くから、八圓の買ひ建となり、六圓となり、何時迄も續けて行くと、元資なしとなる勘定だから、夫れ故に小なる利喰を屢々するので、云はゞ家屋を保護する爲めの垣根を作るのだと。幾分の

眞理は含蓄されてゐるやうにもある。

大理財家は現在の狀況に抵抗することなく、數月先き若しくは數年先きの狀態を豫想し、自分の判斷によりて賣買す。

大資產家になるべき人、乃至相場で成功する人は、現在の狀況に抵抗することはせぬが、强ち目先きの人氣ばかりでは商內しない。現在は斯くあつても數月乃至數年先きになれば、恁うなるとか、ソウなるとか云ふことを豫想して、買ひもし賣りもする。例へば水の低くきに付くと云ふは、千古不磨の原理でありながら、潮流は水の流れに遡つて押し寄せて來る。然し潮がさして來る事實があつたからとて、水の低きに就くと云ふ原理のやぶれる譯はない。水は何處までも、ひくきに就くものである。相場の方で云へば、潮は人氣だ。財界の狀況が、偶々悲境に向ひつゝあると云ふ場合にも、株式は棒に下げるかと云ふに、決してソウでなく、河川に潮のさすが如く、引返しては引落しつゝ、下落するものである。而して此流れに逆らつて上る潮の勢力は、侮るべからざるものだから、好相場師は決して、無理に人氣に逆ふやうなことはしない、靜かに潮の水と共に引く時を待つのである。

相場をするものを稱して、悉皆相場師と云へば、夫れ迄だが、大相場師には、理財家でなくてはなれぬ。故渡邊治右衛門氏の遺り口、今の前川太郎兵衛氏の仕方が、全く大相場師で、現在素露盤玉に乘らぬ代物でも、將來よくなると思へば、拾つて置き、現在安い物でも、末に見込がないと思へば、賣つて仕舞つて、すべて經濟界の狀態と、事業の性質とを基礎として、將來の事情を豫想し、急がず騷がず、分に應じて商內したから、共に千萬圓以上の資產家となつたのである。『投機新論』に諸戸氏を論じた章中、

人は遠眼、近くは視へぬ

諸戸の特に常人と異なつた處は、思惑師で相場師でないと云ふ點である。彼の志は、確に遠大にあつて、目先きのことに餘り頓着せぬのである。志を遠大に持つなどと云ふことは、何んでもないやうであるが、扨て實行の一段になると、容易に出來るものではない。謂はゞこれが人情の缺點とも云ふべきで、何人も其缺點を敢てしない者のないのは情ない譯だ。諸戸は不思議にも其缺點を避けて居る。瞑目沈思すると、直ぐ解る。人は遠き將來の事態を豫測し得る明を持つて居つても、近き將來の事柄は豫測し得ないものである。先見の明は、大抵の人にある。併し目先きの明は、客易のやうで其實目先き程解らないものはないのだが、多くの人が、其解らない目先のことを解らうとして、齷齪して骨を折つて失敗しつゝある。諸戸は此點に於て、確かに難に附かず、易に附いて、成功したのである。コウ斗り云つては、何んだか物

足らぬやうだから、例を擧げて說明して見よう。假りに今日の經濟界だ。大勢が順に復しイ來て、貿易が出超だから、正貨は流入する。資金の分量が殖へる。金融が緩慢になる。スルト株式が騰貴せねばならぬ。隨て一二年の後の株式の價格は、今日のやうな相場に居らぬと云ふ見込は、所謂先見の明とも云ふべきで、これは大抵の人には解つて居つて、而かも又事實ソーなる時があるには相違ない。處で大勢が順境だからとて、三十日後の相場が解るか。三十日後の相場は、高からうかとか、安からうとか判斷し得るとして、明日の相場が解るか。之を知る程六ケ數とはないのだが、場面で商內して居る人は、氣配が好いの惡いのとて、一番知れ惡い目先きの相場に許り拘泥して、賣買して居る。難事を取つて成功しやうとは、覺束ないとではないか。相場師や場立連の多くが、金持ちとならないのは、全く之が爲めに外ならぬ。後進の士は、深く諸戸に鑑みるがよい。

易に附く志は遠大なり

諸戸が遠大なる志を持つて居つた證據は幾らもある。明治十四五年頃、米價の低落を防ぐ爲めに、政府は常平倉を設けた。諸戸の出生地なる伊勢の四日市にも設置されたので、諸戸は時の知事成川成義に取入て、御用となつた。サアコウなると、彼は實に儲け次第だ。米を買入れる時と、賣り出す時に、目一杯に下駄を穿くのだから、忽ちの内に巨萬の資金を握つた。諸戸はその金を何に投じたかと云ふと、彼れの志の程が知れる。明治十八九年頃は、十二三年の物價騰貴の反動（紙幣收縮）にて、地方は一般に大不景氣で、豐作でも米を食はず、稗だの、粟だの、甘薯だのを食すると云ふ有樣で、農商務省は役人を各地に派遣して、行脚で民情を視察させると云ふ騷ぎだから、物價は大低落で、土地の如きは、殆んど三四割方も下落した。當時諸戸は思へらく、兌換制度確立されて、銀紙の差はなくなる。財政の基礎も漸く强固となつて來たのだから、將來土地の騰貴する時期あるべしと看破して、殆ど資金の全部を擧げて、土地を思惑し、また山林を買入れて、これに杉材を植へ附けて、將來の富源を圖つた。夫れで今日の資産家となつたのだが、此ことは容易な人に出來ることか、志を遠大に持つて居る思惑師でなければ出來ないことだ。

市場は急に其大趨勢を變ずることなし。

是は誰れでも知つて居る通りだ。經濟界が悲運になり掛ける。恐慌が起る。これが納まると。商業の沈靜時期になる。其時期が終つて、景氣時代に移ると云ふ順序になつて行くのであるから、一度恢復の趨勢になつたなら、一年や半年で、俄かに變ずるものでないが、實地に商内して見ると、景氣時代の初期であると信じて居ながら、相場が少しでも高くなると、モウ天井ではあるまいか。人氣は一變しはすまいか抔と、種々に

氣を採んで見て、賣つたり買つたりするから、見込は當つたやうでも、其割に金は儲からぬ。一番手近かの話が、東株の新株が五十二三圓で、永がく保合つて居つたのは、遂え一昨年(四十一年六七月)の頃である。其時に百枚を買つて、今日迄乘り替へて來たとすれば、默つて一萬五千圓の金持ちになる。千枚やつたとすれば、十五萬圓だ。其頃、東株の證據金は、六圓だ、六千圓の資金で、十五萬圓儲つた勘定であるのに、誰れ一人コンナ仕事を仕たものがあるか。其當時、桂内閣が成立して財政を整理し、公債整理の方法を立て、經濟界も順次恢復期に向ふと云ふ大趨勢を知らなかつたものは、殆ど一人もなかつたらうに、之を實行した人の尠ないのは、誠に殘念だ。市場の趨勢は、今後半ヶ年や一年で一變する氣遣ひはないのであるから、株式の繁昌時期も、是から愈々本舞臺になるのであるのに、市場では五圓や十圓の上げ下げに、氣を採んで、賣つたり買つたりして、昨の成功者は今日の失敗者となるもの比々皆然りであるが、此句を翫味して、實地に適用させたいものである。

市場が不意の『ショック』を受くる場合に、下落愈々甚大ならば、恢復亦愈々速かなるものなることを記憶せよ。

此理も相場師としては常に心得て置ねばならぬ。市場が不意の激動を受くる場合にとあるから、外交とか、天災とか、不時の出來事があつて、人氣に甚敷き刺激を與へ、爲めに株式が下落する、其度合が愈々大なれば大なる程、恢復力も亦速であると云ふことを覺へて居れと云ふとで、本邦の不時に向へと云ふ諺の意味と大同小異だ。昨年十月伊藤公爵がハルピンで朝鮮人の爲めに暗殺されたと云ふ報知が、株式の引け間際に傳はると、東新株のヂキ取引は、俄然五六圓方も低落して、百五圓となつた。ソウして其手下人が朝鮮人だと云ふことが解ると、翌朝俄然上放れて、

百十二三圓となつて下落した程度より、餘程多く騰貴したなどは、適例である。人氣の消長する有樣は、恰も謔談の樣なもので、引く力が強ければ強い丈け、彈く力も強いと云ふとの意味を、心得て置く必要がある。

決して市場の首領株に、其何にを爲しつゝあるかを問ふ勿れ。之を問ふは、不用意なり。

大手筋に、其方針や商内高抔を聽いて見た所で仕方がない。決して眞實なことを云つて聞かせるものでない。無駄なことだと云ふ意味だ。大手筋が何故に商内を秘密にするのかと云へば、自己の方針や商内が相手に解かると、忽ち其裏をかゝれて、仕事が出來なくなるからである。某大手は、五十萬圓の資産に過ぎぬ、而して米の買ひ持ちが五千枚からある之に向つて五千枚を賣り叩けば、彼の資産では、到底防ぎ切れぬと云ふことが看破されて、所謂腮刺しに來られると、見込は適中して居りながら、一時の相手の掛引の爲めに、投げねばならぬと云ふ不幸に陷ゐるからである。尤も株式の方には、餘り腮刺しと云ふとは、行はれて居らぬが、誰が買過ぎたとか、賣過ぎて居るなどの噂は時々立つ。

久敷下落せし後の不況（タルネス）は、通常昇騰の豫徵なり。

底直百日と云ふ意味と同じで、相場は下落して、不況で永く保合つて居るのは、騰貴の前驅と見て宜しい。即ち陰の極は陽となるものとして宜しい。例を株式で云へば、四十二年五六月の候にあつて、安値で永く保合つた不況の反動が、九月の下旬から十月に掛けて發し、一日に十二萬株からの出來高となつた。四十二年九月の騰貴も、東鐵の市有だとか。東鐵の拂込だとか。鳴物入りではあつたが、前々月以來の不況の反動であつた。同年九月の高値で、實株を多く繫がれた爲めに、經濟界の大勢

は、歩一歩好調であり、金利も下落して居つたにも係らず、十月から十一二月に亘つて、不況を呈して居つた其反動が、四十三年の一月、四分利借替公債發行に現はれて、昇騰したなど、何れも好適例である。

市場は、事情によりて動かず。操り『マニピユレーション』によつてのみ動くといふ。是れ物識らぬ素人の格言なり。

市場に出入する者は、よく三菱が賣つたから、提灯を點けるの、三井が買つたから、高からうといふが、これは大間違の骨頂と申すものだ。相場は、もと〳〵財界四圍の情勢によつて動くもので、如何なる富豪の力を以てしても、勝手に左右する譯には往かぬ。

商家秘錄にも

相場の高下は、人の賣買するに付て高下するといへども、これをなすは、人力の及ぶ所にあらず、天地自然の道理なり。大富なる人、金銀の力を以て、買締め或は賣出すとき、一旦其米の高下ある樣に見ゆる事ありといへども、始終に其功あることなし。萬民の人氣、日本國中より集りてなす高下なれば、一人の力を以てなすは、譬へ如何程の大富なる人とても、成らざる道理と辨ふべし。

とあるが、此道理を辨へなく、何處までも相場は、人爲の操りのみで動くものと思つてるから、飛んでもない失敗を取るので、同じ格言でも、物識らぬ素人の格言は、服膺せぬがよい。

然し此人爲の操りで、相場を動かさうとした例は、英雄豪傑と呼ばるゝ人にも隨分少くない。石田三成などは、差當り其卷軸に据はるべきものであらう。德川家康といへば、地位といひ、聲望といひ、力量といひ、當時に肩を並べるものなく、豐太閤沒後の天下が、斯人に歸することは、自然の大勢であつた。太閤も此處を見拔いたればこそ、嗣子秀頼を家康

に付託し、何處までも其情義に訴へて、豐臣家の祀りを存せようとしたので、前田利家を初め、加藤清正とか、福島正則とかいふ譜代恩顧の諸將が、成るべく家康の機嫌を損ぜぬやう、百方骨を折つたのも、ツマリは大勢不可と見て取つたからの事。豐臣家の身上、衰微したとはいふものゝ、無一文となつた譯でもなく、殊に相手の家康は、生先き短い老人であるから、斯うやつて居る内には、何れ一ト變化が來るに相違ない。まづ夫迄は、つらくも我慢して時節を待たうと、將來の思惑を立てたものも、尠くなかつたらしい。其處へ持つて來て、三成は人爲の操りで、無理に相場を釣上げようと焦燥立ち、到頭關ヶ原の大戰爭を開始したのであるが、地位も貫目も十分ならぬ、刀筆上りの身分でありなだら、浮田、毛利、島津等を初め、全國半ばの諸侯を糾合して、家康といふ英雄を向ふへ廻はして、乘るか外るか、天下分け目の大投機を試みた手腕器量は、實に凄じとも凄じく兜町などへ持つて來たなら、

絶倫無類の相場師であらうが、然し大勢には敵し難く、一場の慶戰、脆くも大敗して、豐臣家の株は、殆ど無價同樣に暴落してしまつた。

此繰りで動かぬ適例として大阪に橋伊と云ふ相場師があつた同人が相場界で、大に馳驅したのは、既往廿年前にあつたが、其以前にも、隨分面白い事實がある。彼は堂島の仲買として、相應に儲けたこともあるが、損をして流浪の身となつた。堂島の相場は、土地柄丈けに至つて細かく、二厘五毛だとか、七厘五毛だとか云つて、才取中之れを巧く取扱ふものが、腕利きとか巧者とか、評判される。橋伊は根が思惑氣が強い方だから、此の取扱方が至つて上手であつたと云ふことだ。或る時、少しばかりの金を持つて、日頃出入して居る仲買店に至り、私は金が茲に之れ丈けありますから、五枚丈け米を賣つて貰ひたいのですと、賴んだ。改めて云ふ迄もないが、堂島と云ふ土地は、昔から相場の行はれて居る丈けあつて一私人が單に金を貸して呉れと賴んでも、容易に承知して呉れる

ものは、至つて少ないが、米を何枚して呉れと頼むと、妙に承知する。これが爲めに立身したものも少なくない。コウ云ふ土地柄で、橋伊は丸で元なしで相場を遣らせて呉れと頼んだのでないから、主人は橋伊に向ひ、御前さんが賣つて呉れと云ふなら、賣りもしやうが、今の買方を誰れだと思つて居なさる。磯野さんではないか、アノ人は數年當り續けて、今其向ふを張らうと云ふものもない程である。アノ人が買ふで居る限り、下落すべき相場も、一時釣り上げらるゝやうなことがないとも限らぬから、買ふなら兎もかく、賣りは暫らく見合せて置いた方が宜からうと忠告した。その時橋伊の答が餘程面白い、磯野さんの有力者たることは、私も知らぬではありませぬ。アノ人の當りつゞけでゐることも存じて居ります。私はアノ人の當り續けてゐるが爲めに、賣りたいのです。磯野の數千枚の玉は、力がないでもありますまい、未だ資力の竭きたのではないのですから、尙ほ大に買ふ處もありましやう。併し磯野さんの玉は、私の玉とは一心の籠め方が違ふて居ります。アノ人は、既に驕り、私は之れから取り附かうと云ふのですから、深く考へた上でなければしませぬ。五枚の米、僅かなやうではあるが、私は磯野さんと雖も、此玉を受け切れないやうになるだらうと、窃かに信じて居ります。申すも吁呼のやうなれど、此玉で五年目には、五萬枚位の賣買をする人となる積りですと、熱心面に溢れて頼まれたので、賣つて遣つたそうだ。一心を籠めた玉は、果して見込違はず、利を入れて賣り直し、ダンダン玉を殖やし儲けて、五年と云はず、三年目には最早一二萬の玉をするやうになつたと云ふことだ。ドウだい、此事實は、大に後進の鑑みなければならぬことではあるまいか。相場は金力だとか、膽力だとか云ふけれども、見込さへ適中して、玉の運用其當を得れば、タッタ五枚の玉からでも、大手にもなれゝば、相場で成功することも出來るの道理。現に此事例が橋伊にありとすれば、後進の士は奮發一番して可なりだ。徒らに大手が買ふたから高

からう、賣るから安くはないかと思ひ、自己の見込を練磨しないで、儲けやうとしたからとて、夫れは容易に出來ることではない。忽ち得れば忽ち失ふと云ふものだ。

斯る例を擧げたなら、いくらもあらうが、市場に於ける『マニピュレーション』の實證は、次句に示す。

『マニピュレーション』は、世間一般の人氣添はざるときには、必ず常に反動を起す。

『マニピュレーター』は、槿花一朝の榮のみ。總ての事情。己れに添はざれば忽ち凋落す。

『マニピュレーション』とは、投機者が物貨の平準を妨げ、自分の利益になるやう、物價を動かさうとして施す手段、ツマリ操相場の事である。コンな仕事は、一般の人氣が乘つて來なければ、成功が覺束ない。人爲で相場を左右するのは、恰も室咲きの花の樣なもので、開いたかと思ふと、忽ち散つてしまう。然し人氣が添ふと、たまには巧く行くことが、無いとも限らぬ。まづ斯ういふ意味だ。

著者は、必ずしも三井家を以て『マニピュレーター』とは言はないが、然し明治三十年、故中上川彦次郎氏が、三井家の所有財産とする目的より、六七萬株の炭礦株を市場で買取つたのは、確かに『マニピュレーション』で成功した、例とすることが出來る。中上川氏が何故、炭礦株に向つて、斯る巨額の買物を出したか、其眞意の程は知らぬが、當時の取沙汰によると、三菱家は、九州方面を自分の勢力範圍にする見込で、着々同方面へ放資し、九州、筑豐兩鐵道の大株主となつて、會社の重役をも左右すべき實權を握り、筑豐の石炭礦を所有し、長崎に船渠を設立する抔、經營に扱目なきを見て、三井家でも、何れへか繩張を極めねばならぬ樣に感じたものゝ、九州は三池炭礦を除くの外、最早や放資の餘地がないの

で、東北より北海道へ掛けて、勢力圏を張らうと決心し、三菱の九州、筑豐兩鐵道に於ける如く、炭礦の大株主となつて其實權を收め、これを足溜りとして北海道の產業界を占領せんものと、さてこそ炭礦を買出したとの事であつたが、兎に角中上川氏は、半田庸太郎氏に炭礦買取の命を下した。商內上手な半田氏は、何處までも秘密に現物を集めようとしたが、三千や五千の株でないから、なか〳〵さう容易に集らない。其處で定期へ鋭く買進み、本尊を知られない中に、仕事をしてしまう必要から五六萬の大玉を數日間に入れた爲め、一時相場は廿二三圓方も騰貴したが、何樣經濟界の狀態は、決して順調でなく、ソロ〳〵悲境に向つて居た際であるから、買つて仕舞つた後の相場は、二十圓から三十圓方も下落した。三井家のやうな富豪なればこそ、數萬の株を一時に買取り、三十四五圓方引かれても、猶ほ踏み怺えることが出來たのであるが、並大抵の『マニピュレーター』が、斯んな芝居を打つたなら、瞬く間に失敗してしまう。此外に、日露戰役後の三十九年、成金黨の羽振を利かした際、例の鈴久、酒井、富倉などの一團が、吳錦堂の鐘紡大賣りに買向ひ、權利數で爭ふ覺悟で、會社に增株の請求と出掛け、到頭會社を屈せしめて、百二三十圓の直頃から三百圓まで釣り上げたこともあれば、また磯村、秋山等が、淺草組と稱する江崎禮二などゝ相通じて、市場に日糖の大買物を出し、會社の乘取策を試みて、相場を釣上げたこともあるが、是は時勢が然らしめたので、彼等の『マニピューション』なくも、自然騰るべき市價であつた。それを彼等が率先して買立て、其時期を早めた迄のこと。ツマリ總ての事情が、巧く添つた爲め、偶然に成功したのである。操相場の中で、最も趣味のあつたのは、三十一年の炭礦買占の失敗であらう。當時㊤商店といふ株式仲買があつて、本庄伊太郎氏を名義人として、横山源太郎氏が黑幕に控へて居た。この横山氏は、大詩人小野湖山翁の次男にも似氣なく、非常に山氣の强い人で、嘗ては㊤組の顧問とな

つて、米の買占を企て、土佐丸事件として有名なる歴史を殘した程の人であるが、日清戰役後の狂熱相場時代を經過して、市場も漸く落付きさうになつた三十年の頃、財界の恢復期に入るのも、近く一兩年の中にあると見て取り、爰に一つの目論見を立てた。それはドウいふ事かといふに、其頃最も賣買の出來て居つた日鐵、山陽、九州、關西、炭礦など比較的確實なる株式を、各種三五千株づゝ買取り、銀行へ擔保として引取り、二三年持ち悠へて居るなら、時價著しく騰貴して、巨萬の差利を博することが屹度出來るといふ意見である。ケレども此意見を實行するには、諸株で總計四五萬株を引取らねばならぬのであるから、一人や二人の力では、到底巧く仕畢うせる事が出來ぬ。少くも五七人の同意を要するといふので、自店の得意なる十五銀行の山本直成、根室の柳田藤吉、佐賀の諫早などいふ歴々の連中を勸誘した處が、何れも其主意には贊成したものゝ、去らば同盟を形作つて、一致の進退をしようといふ一段に

なると、皆二の足蹈んで、ツマリ出來ない相談に畢つた。尤も勸誘された人々は、上商店年來の得意であつたから、御義理半分に銘々これと思ふ株式に、買注文を發して呉れた。斯くて同店は、三十年七月頃より愈計畫の實行に着手し、前記の日鐵、山陽、關西、九州、炭礦株などを買取つた處が、經濟狀態は、表面こそ靜穩なれ。內部は、戰役後過度の新事業を起した祟り非常に强く、三十一二年度に亘りては、ドウしても恐慌の狀態を現出せねばならぬ有樣であつたから、なか〳〵三千や五千づゝの買物位では、買つた時だけは、價格を維持するが、買手が途切れると、直にヂリ〳〵下落して仕舞ふ。流石剛膽の横山氏も、これには痛く閉口し、斯う多數の株式に力を分けては駄目だ。精鋭を一種の株に集中した方が、攻むるにも防ぐにも都合がよいと考付き、其買建てを炭礦株に制限した。其頃は、今の東新のヂキのやうに、炭礦のヂキが立つて居て、横濱取引所でも、炭礦のヂキ賣買があつた。其處で氏は巧みにヂキ

を買煽り、其差金を以て、定期を買取つたが、其手際如何にも巧妙で、何人にも商略の裏を看破されなかつた。今日の財界なら、三千や五千の受渡があつたとて、何の不思議も無いが、何にせよ卅年頃の事であるから、[illegible]商店の定期、ヂキで、炭礦株を連月買取るのが、非常の評判となり、市場より注目されたものゝ、まだ馬鹿にして賣込む手合が多かつた。スルと忽ち直を釣られ、如何にも無理相場らしい處があるので、斯んな不自然の遺り方が、到底長く續く者でないと見て、猶ほ賣込むと、又釣上げられる。然し當月は、受株が出來まい、來月は屹度投げるだらうと、飽まで賣つて行けば行く程、怯まず買ふ、其武者振の勇しさ。横山氏は、自分の店だけでは勢力乏しく、市場から輕蔑されるとでも思つたものか。當時日の出の勢ありし故井野粂吉の店を始め、矢島平造、石見權兵衛、小林勇次郎等の諸店を味方として、十月限二千六百株、十一月限四千百二十株、十二月限七千六百六十株三十一年一月限で六千七百五十株、二月限一萬一千八百株合計三萬三千株を定期だけで受け、ヂキでも日々受株した。其上、三四五月期に亘りても、數萬の買建を擁し、悉皆受株すると吹聽したので、當初から馬鹿にしてかゝつた賣方連は、大いに吃驚し、一體斯る多數の株式を買取るほどの有力者は、果して何人であらう。山本氏の關係よりして、岩倉家の買物との噂も立つた。けれども同家としては、其數が餘り多い。阿部彦や雨敬などが加擔して居るとしても、仕事がチト大膽過ぎる。取引所理事長の大江氏が內密同盟して居るとの說もあつたので、取引所の取引銀行の預金を調べて見たが、一向に去る形跡がない。夫れに連月受けた株式が、何處かの銀行へ、抵當となつて居るかと調べて見ても、二千や三千株の貸出はあるが、纏つて貸出したものは、ツイ見當らぬ。餘りの不思議さに、三井の益田氏などは、露西亞人の仕業ではあるまいかといふ疑を起して、稅關まで調べて見たけれども、別に之が爲め、金銀の輸入された證據もなかつた。當時賣方の主

力は、故今村清之助、田中平八諸氏で、初めのほどこそ、馬鹿にして賣向つたれ。斯く連月受株されて來て、愈々三月限當切までも受株されることになると、渡株不足の爲め、降を買占派の軍門に乞はねばならぬハメに陷つた。今村氏などは、元來炭礦株嫌ひで株主でなかつたから、香川敬三男、杉孫七郎子等の持株を借り集めたが、猶足りないので、田中氏に借株を申込むと、氏も當切及び中切に繋いで居り、もし貸して仕舞つて中物を受取られるやうになると、人の爲に首を縊らねばならぬ仕義となるので謝絶した。今村氏も今は絶體絶命。色々と手段を廻らして、買方に探りを入れて見たが、矢張解らぬ。然し外國人でないとだけは明了したから、少しく安心の胸を撫で下し、相手に受株の用意が出來て居れば、夫れまでの事。無論戰は敗北だが、既に外國人でなく、三井、三菱でもないとすれば、輙く調達し得るものでないと考付き、三井、三菱を初め、重なる銀行に向つて、數百萬圓の借約束をなし、買方の資金融通を喰止めた。此日歩ばかりでも、なか〳〵容易な高ではなかつた。處で買方側にては、渡株の不足して居ることが明白で、戰は勝ちと定つたものゝ、見せ金だけは備へて置かねばならぬから、其金策に奔走したが、今村氏の方より早や手が廻つて居たから、貸さうといふものなく、三井の中上川氏との間には、約束成立するばかりになつたが、是も何かの行違から、不調になつて仕舞ひ、哀れ賣方同樣、纔かに一縷の望みを渡株不足に繋ぎ、扨いよ〳〵受渡當日となつたから、已むを得ず泰然自若の體を裝ふて、悉皆の株が振込まれたなら、總代金を振込むと揚言して居た。スルと其日の午後五時頃に、某新聞號外の聲喧しく、買方調金不足を報導し來た。此號外こそ、賣方の爲めには、屈强の援軍であつた。トいふのは、當切即ち三月切さへ受株し得ぬ位なら、四切、五切の受られぬとは、無論の次第であるから、株の貸手は何人も出て來た。今村氏は透さず此株を借込んだので、今まで不足した株が、却つて有り餘るやう

になりそれを取引所へ振込んで、サア總代金を振込めと迫つた爲め、數月に渉つた買思惑、脆くもこゝに全滅した。操り相場の末路は、大抵コンナものだ。

工業株の下落するは、商業に反動來るの徵なり。鐵道の輸送數量の減少は、鐵道株下落の前驅なり。

諸株の高下が、經濟界の事情に左右さるゝものたることは明かであるが、其會社の事業の盛衰からも、亦高下することを忘れてはならぬと云ふの意味から、工業株類が下向になつて來るやうな場合は、其會社の收益が減少したとか、前途減少すべく見越されたとかで、商業が大不景氣になつて來る前徵。又鐵道株の輸送數量の減少は、取りも直さず收益が減じて來るのであるから、其鐵道株類の相場は、配當減少の爲めに下落する傾向を有して居る。

小損失は、往々大利得となることあり。

自分の見込が間違つたと思つたら、少し位の損失に頓着することなく、早く見切を付けると、後になつて、夫れが大利得となるものであるから、苟も相場で成功しやうと云ふ氣ならば、煎れ投げを早く付けねばならぬ。黑人は利喰が強くて、引れ腰が弱い。素人は引れ腰が強くて、利喰が早い。これが相場で黑人と素人の岐る處と云つても宜い位のものだ。龜田氏の商內振りは、非常に引れ腰が弱い。石崎(政藏)氏の商內は、利乘せが非常に強い。禪語に賊騎に乘つて賊を追ふと云ふがあるが、相場して利が乘つて來る場合には、敵の馬に乘つて、敵を逐ふやうなもので、やる處迄やらぬは嘘だ。戰でも追擊に移つたならば、猶豫してはならぬと同じ理合で、退軍の場合も、其引き方が上手ならば、矢張好將軍たるを

失はぬ。相場師も然りで、小損失は往々大利得となる基だと云ふことに考へ及ぼして、見切どよくするのが肝要である。拙著『投機新論』に

奇妙な算盤

何に商賣に拘はらず、イザ始めるとなると、これで幾何の利益を得やうとして、とかく自分免許に利益の方へ、素露盤をはぢきたがるものだ。處が人事多く意の如くならずで、夫れが反對に損をしてまごついて、其上に此損を取り返さう、取り返さうとアセるから、益々損の上塗りをするやうなことは、往々有り勝ちの事だ。商戰中取り分け烈しい相場に於いては、殊に然りで、老人は常に思ふよ、コレコレの玉を仕掛けて、幾何の儲けを仕樣との思惑を立てるのも、成程惡くはないが、靜に考へて見給へ、コノ利益と云ふものゝ裏には、如何なるものが居るか、云ふまでもなく損失なるものが、これに伴ふて居るのは、動すべからざる眞理ではないか。然らば茲に一つの思惑を立てるに付いても、穴勝ち儲けやうとの考へのみを先きにせず、まかり間違へば、幾何迄の損するか、又其損失に耐へ得るかを決定して掛かるのは、一寸考へると、消極的の引込思案で、如何にも愚なるが如く見えるが、實は大いに賢なる素露盤の持ちやうではあるまいか。早い話しが、紀の國や文左衛門が、沖の暗いのに蜜柑船を積み出した當時の彼れ自身になつて考へて見給へ。遠州灘七十五里を美事乘切る迄には、必ずや此まかり間違へばといふ事が、一攫萬金に對する先決問題であつたらう。敢て紀文のやうに一度に危ぶない思ひ切りのよい藝を遣れと勸めるのではない、又遣るなと止めるのでもない。總じて事は、時と場合と人に依つて違ひがあるから、ソレは名々の勝手であるが、畢竟其精神、言ひ換ふれば、始終一徹に此道理を呑み込んで貰ひたい。俗に損して得を取ると云ふ言葉は、誰しも知らないものはなからう、否、十分知り拔いて居るが、只だ實行する人が甚だ少ない。奇妙な素露盤と

云ふも、外ではない。前に云ふやうな主意から、假りに老人が名付た言葉で、實は奇妙でも何でもないのである。而して當今の相場界で、此奇妙な素露盤主義で、巧みに投機社界に處するものは、先づ以つて龜田電光を措いて、他に多く類がなからうか。龜田と交際したものは、誰でも知つて居ることだが、アレが相場をするに、何枚遣つて見やうとか、何株買つて見やうとか云ふことは、決してしない。アノ男は出入の仲買に向へば、私は今度見付けたから、一番三千圓丈け張つて見やうと云ふ。コンナ具合に、始めより損の限度を極めて掛る。夫れで見込が違ふて引かされると、理非に拘はらず蹈んで仕舞ふ。コウ云ふ遣り方だから、他人の厄介になつたことがないのだ。ソウして一度も大損をせぬのだ。之れが龜田の特長で、何人も模範とすべきことである。何んと愚なるが如くにして、實は賢なる素露盤ではあるまいか。

一切の株券は、幾分か一般市場と俱に動くもの也

株式の市價は、夫々其株式を代表せる會社の事情に依つて、千種萬別であるが、元來相場なるものは、人氣に依て高低するものなる以上、或る株式が騰貴すれば、他の株式も從つて騰貴の趨勢にあることは、動すべからざる理である。賣買者は常に其心得がなくてはならぬ。

今日でも株式仲買で居る半田庸太郎氏の全盛時代の商内振り抔を見ると、自分が賣りなり買なりの方針を立てると、日鐵、山陽、九州、關西以下、何れの株でも賣つて、最終の東株迄叩くと云ふ商内振りである。是は或る點から云へば、取引所の事情と紡績業の營業成蹟とは、自ら狀態を異にして居り、紡績株に賣るべき理があつても、東株には却て買ふべき事情が伏在して居らぬ共云へぬから、半田氏の商内振りも、時に取つて當て篏まらぬともあらうが、大相場なるものは、會社自身の事情、即ち自

働的に動く場合もあるが、多くは金融の事情、乃至財政經濟外交など、他働的に動く場合が多い。それであるから相場の大變動のある場合に當ては、市場が狂熱乃至狂冷に失して來ると、玉石を淆混して、買つたり投げたりするを常とする時に當つては、半田氏の商内振り、即ち一切の株券は、一般市場と倶に動くものなりと云ふ原則を妙用する處だ。併し市場に著しき變動なく、落付て居るときには、會社の事情次第で、需給に消長を來たすものであるから、語中にある幾分かと云ふ意味に重きを置いて掛引するを、上策とするのである。

之に反して、株式仲買人の村上太三郎氏の商内振りは、半田氏の商内振りと全く正反對で、一般市場と倶に動く者なりとの原則を適用しない方だ。市場が順調でも、否運の時でも、商内を仕掛るに當つては、會社と事業の性質とを吟味して、始めて商内する方だから、經濟界の大勢が如何に好順であつても、自分の眼識に叶なはぬ株式は、必ず賣つて居る。

同じ紡績株でも、富士紡績は買ひであるが、東京紡績は賣りであると云ふて、賣込むと云ふやうなことをして居る。此方法で、大日本精糖株の商内では、大當りであつたが、日本醤油株では、味噌を付けはしなかつたものゝ、大分辛き目に遇つたとのことだ。兎に角株を調べる商内振りは、僥倖で儲けないのであるから、一擧に莫大の富者となるには、ドウであらうか、ダが、一朝地に塗れて、大失敗に陷ると云ふやうなことはない。又心得て置くべき事である。

ウオール街の助言は無謝義なり。而かも傾聽の價ひあり。

ウオール街で評判の立つた噂は無謝義なりと云ふから、別に禮金を拂はんでも聽く事が出來る。而かも傾聽の價ひありと云ふは、噂に付いて傾聽せよと云ふのではなく、只だけの値打に過ぎぬと云ふのである。約し

て云へば、ウオール街の風説や評判などで漏るゝ噂は、報酬なしで聽く事が出來るが、報酬のない丈けの値打に過ぎぬものと心得て居れ。浮かりして噂や風説に迷ふて商内すると、大なる間違を起すぞと云ふのである。成ほど國際間の關係は、至つて親密である時に、外交文の往復位があつたからとて、夫れが大事にならう筈はないのであるが、外交だ外交だと、兜町の外交が年に幾度あるか、兜町の利下げや利上げが、月に幾度あるかを實驗して居る人は、日々に吹聽さるゝ風説などに、眞を置く必要が少ない。

顧みて考へると物價些少の高下も、相場師にとりては、忽ち自己の利害に感ずるから、彼等の觀察は、極めて緻密であり、且臆病で、非常に神經が過敏となつて、風聲鶴唳にも動搖する。米國の排日熱、滿州の中立問題など云ふことでも、直ぐに株が上げたり下がつたりする。彼等相場師の一日雨降れば、長シケと案じ、三日も照込むと、旱魃を案ずる。善ければ善すぎると案じて、幾多の波動を起させる、後から追想すると、當時恐るべく忌むべく感じた事柄の十中八九は、泡沫夢幻と消へて、一時の杞憂に過ぎなかつたことが多い。併し斯くの如く捕風捉影のことに狂奔するは、百中二三の大革亂に備ふる所以で、例へば父母が愛子に對する情の如く、僅かの寒冒でも、直に大患を聯想し、數時間見えなければ、尋ねもすれば迎も出だす、其百中九十九迄は、過慮徒勞に過ぎないのであるが、この百千の過慮徒勞が、一朝の大事を避くる所以であるから、噂だからと云つて、サウ絶對に馬鹿にもならぬものである。

次回の騰貴を待ちて賣らんと欲せば、廣く賣行き ある有價證券のみを買へ。

此語も、少し相場に經驗ある者は、誰れにも解かつて居るが、素人には解かるまい。素人の考へからすると、株式の賣買が盛んに行はれて居る

か居らないかには、餘り重きを置かないで、只其株は割が高いとか安いとかにのみ重きを置いて居るから、手慣れた人が、貴下の御希望の株式は、割合にあるかも知れませむが、買取つても、廣く賣買が行はれて居りませぬから、イザ賣らうと云ふ時に、拔き差しが付きません。詰り買ふ時は高く、買はねばならず、夫れを仕舞ふとすると、安く賣らねばならぬやうになるのですから、他の株を買ふては如何ですと忠告すると、何に其事は夙に承知して居るが、僕は引き取るから、差支いないではないかと云つて、剛情に引き取るのが多い。實際斯かる株式を引き取つて置いて、高く賣り拔ける機會を得ればよいが、若しソウでもなかつ日には、意外の損失を招くのである。四十年の狂熱時代の成金が全滅したのは、東株や紡績株を買持ちして居つた祟りもあらうが、多くは人の目に觸れぬ小樽木材だの、横濱鐵道だの、乃至東京紡績など云ふ、三流四流の株で損をしたのだ。之に反して賣行きある有價證劵であれば、何れの場合にあつても、買手があるから、思惑する程ならば、世人に多く珍重されて居る株式を撰んで、思惑せよと云ふのである。

有益なる助言を與へ得る力あるものは、最も與へんことを欲せず。

相場師仲間で最も聞きたい人の意見は、先方で聞せることを欲しない。相場が高いとか安いとか、矢鱈に講釋する人の助言に限りて、少しも有益でないばかりか、時折利用されて、反つて害になることがある。今日では大に薄すらいだが、二十年昔などには、大手となると、自分の駈引は、味方にも知らせない。特に龜田電光などは、米を商内する場合、自分の手代に命じて、何圓何十錢の相場ならば、百枚買へと云ふから、其通り出入の仲買へ注文を出し、自分も主人の米に提灯を付けると、何んぞ測らんや、手代に買はせに遣つたのは商略で、市場に自分の買ふこと

を吹聽させて、相場を釣り上げ、窃かに他の仲買店から、多數の買玉を賣り拔け、又新規に賣るやうなことをしたものである。是れは只龜田ばかりでなく、大手は大抵遣つたことで、相場の見込を聞きに行くと、高そうなことを云つて居るから、買ふのかと思ふと、反對に賣り、賣るかと思ふと、友達をも欺いて買つて居たなどの例は、少くない。其頃市場の賣買範圍が狹かつたから、コンナことでも仕なかつた日には、玉の拔き差しが付かなかつたかも知れぬ。兎に角其駈引の仕方が、東西符合して居るのは、妙でないか。

上るものは、下らざるべからず。

陰陽循環、寒來暑往、ァ、暑いといふ土用最中に、陰氣動き初め、オ、寒いといふ冬至の節に、一陽來復すると同じく、相場の高低も、強き中に弱氣を含み、弱き間に強氣を萠して、互ひに循環變化するものぞと云ふ迄で、解りきつた事のやうではあるが、なか〳〵廣大微妙の眞理を包括して居る。

尼子經久、或るとき物識りの僧を呼んで講釋させた序でに、自分幼少の折、手習師匠より剛柔虛實といふ文字を敎えられたことあり。此四字の義を聞かばやといふ。僧委しく字書を引きて、義を解き理を述ぶ。經久打頷いて、左樣に長き道理は、記憶して居られぬ。只た剛は柔の終り、虛は實の本と心得て、文字作りし人の了簡に違ふことあるまじやと問ふから、僧如何にも違ふまじき旨答へると、經久、我れ早や合戰の道より、治國の法に至るまで、皆此四字に盡くることを知れりといつて、大に喜び、謝禮として綿一屯を僧に取らせる、其氣色の尋常にも麗はしきを見て、近侍の一人十四歳ばかりなるが、傍より負けは勝の始め、吉は凶の源と、最と低聲に獨語した。

流石に富田七百貫の地より起つて、出雲、隱岐、因幡、伯耆の四ヶ國を

打平げ、覇を山陰に稱へた經久主從ほどあつて、一場の講釋聞いて、即坐に剛柔虛實の四字訣を發明した處は、エライものだが、剛は柔の終り、虛は實の本といふも、負けは勝の始、吉は凶の源といふも、上るものは、下らざるべからずといふのと、同一の眞理で、これだに體得すれば、相場界の尼子經久たることは、何でもない。

先づ確實に幾何の利益を收め得るかを思考し、相場既に豫期の數額に到達せば賣れ。而して强大なる反動來る迄は、再び關係すること勿れ。

二度の思惑を禁制したのである。先づ最初思惑を立つる場合に、幾何の利益あるかを決定すと云ふから、茲に或る紡績株があつて、其配當が一割何分に廻る。百廿圓で買つて六朱に廻はる。預金して置けば、四分にしか廻らぬ、處で鐘紡の百圓の時價は割安だから、百廿圓迄は買へると

して、手を出したならば、二十圓の相場が來たなら、一度賣つて置くが宜ろしい。ソウして强大なる反動、大瓦落か大暴騰がある迄は、再び關係せずに、暫らく見て居るが宜しい。これが即ち必勝の法であると云ふたので、昔から多少の資金があつて、見込が當つても、二度の思惑に取り掛るため、失敗する人が多い。例へば東株は、出來高から見ても、利廻りから見ても、二百五十圓の値打があるとして買取つて、二百五十圓になると、三百圓間際も有るかのやうに思つて見たり、或るは二百五十圓になると思つたのが、六十圓となると、直ぐ賣つて見たりするから、其れが終に失敗の基となるのである。注意すべきことだ。

大收益を計畫する時は、小利益を爭ふこと勿れ。

豐臣秀吉、關東征伐の砌、佐野天德寺を召して、武田上杉の事を尋ねられた。天德寺委しく兩家弓矢の樣子を物語り、信玄は、十六歳の初陣よ

り五十三歳までの間、一度も武道に勝利を失つたことなき旨を演說すると、秀吉聞いて『左もあらん。左樣に捗行かざる小刀利きの武道にては、天下に思ひ掛くること、なか〳〵思ひも寄らず。此者など早く相果てゝ、外聞をば失はす。只今これあるに於ては、秀吉が草履取にして遣る』とて、大笑ひされたといふが、如何さま、信玄謙信いづれも、日本總體の碁盤面を、何とかしようとの志はありながら、河中島といふ一目二目の切爭ひに血道をあげて騷ぎ通した處は、全く小刀利きの武道なるを免れぬが、其處になると、秀吉などは偉いもので、一目二目の負け勝ち抔には、少しも頓着なく、サッサと全局の勝を制して行つた。織田信雄、德川家康の聯合軍と、長湫の一戰に、見苦しき大敗を取り、其後の手合せにも、捗々しい勝利が無かつたとき、部下の諸將、非常に殘念がつたけれども、秀吉一向平氣にて、よし〳〵此上は、位詰めにして呉れん、今に家康めを、長袴着せて上洛さすべしとて、先づお人好しの信雄をたらし込んで和睦し、それより家康に內通して、背後の患をなした紀州の根來雜賀、四國の長曾我部元親、越中の佐々成政を、片端から打平げ、越後の上杉景勝をも味方に引入れて、家康を孤立の地に押落し、ヂリ〳〵と八方より詰寄せた。流石の家康も、コウなつては、手も足も出されず、居ずくまりの體で、內心閉口して居る處へ、異母妹朝日姫を呉れて、姻親かた〳〵の和睦を結び、更に母堂大政所を人質として、岡崎へ下し、到頭家康を引付けてしまつた。此大政所を人質にやらうとしたとき、蜂須賀彦左衛門などが、古より今に至るまで、天下人より其下の者へ、人質出した例がないといつて、諫めた處が『天下に例なき事を、秀吉仕置き、日本の後記に留むべきぞ。我に隨ふ國々は、早や三十ヶ國に及べど家康は僅か四ヶ國なり。我が威光日を追つて募らば、家康眞逆に此人質を、はた物にかけ、火炙りにせん抔とは申まじく、此上は愈々位詰めになるべし。皆々聞き候へ。家康と和談濟めば、東國は外ヶ濱までも、即

時に計隨ふべきものなり』といつて、遂に人質の事を斷行した。味方の大敗をも心に留めず、母を人質とするの不見識をも恥辱とせず。智勇雙びなき名將を位詰めにして、東國は外ケ濱までも、ひた推しに推し片付けようとした大膽識は、全く天下に例なき離れ業で、信玄謙信如き小刀利きの武道が、なか〳〵思ひも付かぬ處である。

大收益を計畫するときは、小利益を爭ふこと勿れといふのは此處だ。經濟界の狀勢を見通して、大相場があると知りつゝ、相場の綾を取つてやらう抔と、生巧者に考へ、僅かばかりの利益を爭ふと、機會は瞬間に去來するから、己れが利喰して、綾を取らうとした爲に、大なる反動に出逢ひ、折角見込は當りながらも、大失敗を取ることがある。弱氣で居て、下げ相場に引掛つたとか、强氣でありながら、賣つて居たなどといふは、皆是れだ。

十中六度、見込の當るものは、資産を起し得べし。

十度相場を試みて、六度見込が當る人は、資産を起し得る人であると云ふ。歐米では、如何にも其通りであちうが、本邦では十中少なくも、七度以上見込の當るものでなければ、資産を起し得ない。何故かと云ふと、商内をすると、政府に向つては、取引所稅を拂はねならず、取引所へは、株主の滿足する配當を受くる程の、手數料を拂はねばならぬ。而も多數の仲買人が、立派に營業して行かれる費用も、來客から支拂ふのだから、十度試みて、差引一分の利益があつた位では、資産を起す處か、自己の暮しを立ることさへ覺束ない。是は東西取引所の組織が、違ふのだから止むを得ない。尤も澤商店の森戸氏抔は、相場巧者で、十度の相場に七八度も當てる技能を有して居るだけでなく、營業振りも信切で、開店以來一回も、商内高で取引所の優賞に漏れたことのないのも珍らしい。

久敷動かざりし株式の動き初めたる時、之を賣る勿れ。

相場師の教訓としては、如何にも警句である。久敷動かないで居つた株式の、商内が出來初めた處へ、向つて賣るのは禁物である。ト云ふのは、其株劵が動き出したと云ふには、夫れ相應の譯がなければ、動くべき筈がないので、相場師が操り出したのか、夫れとも其會社に好事情が湧いて來たのか、何かあるに違ひなく、之に向つて賣るのは、至つて愚氣だ。一會社の株式然りだから、全體の市場に取つても、亦然りと云はざるを得ない。相場が久敷保合つて、人氣が沈靜の極に達した後、一二の株劵が、割安狙いの爲めに買はれて高くなると、之に連れて他の株式に買氣を誘ふて來て、一齊に騰貴するの例は、既往に尠なからずだから、此場合容易に賣る事は、不得策である。（四十三年）春の場面で云つても、前年末不況の後を受けて、一月の發會から、人氣は如何にも沈靜して居つた。其處へ横濱倉庫株が、横濱鐵道の線路が、會社所在地へ延長さるゝ樣になるとか、會社の土地が鐵道院に買ひ上げらるゝとか云ふので、思惑者の着目する所となつて、不況中にも係らず、五七圓方騰貴して、先づ一枝開いて天下の春を知るの感あらしめた。これが動機となつて、電燈株が增資で買はれた。瓦斯株が御招伴で上げかけた。郵船株も着目された。夫れから精糖株、東株と云ふ樣な順序で、總ての株式が札の掛る樣になつて、株式界の春風を誘ふととなつた。去れば何人にもあれ、此上げ掛けた鼻に向つて賣つたなら、何れも損毛せざるはなしである。鑑ひべき事だ。

明白に道を得るに非らずんば、何事にも着手する勿れ。

賣買を仕掛くる前に、十分に考へ、明白に賣るべき道理、買はざるべか

らさる筋合を、考へ付けた上でなければ、商内を仕掛くるなと云ふ迄の事で、前にあつた『忍耐なれ』と云ふ格言と、大同小異の格言である。

有價證券高き時、殊に市價の放資價格以上に在る時は賣れ。

八木虎の卷に、

米段々上る時、種々強き原因申立て、猶々上げ、人氣も強く、我も買ふ氣になり候節、火中に飛入る思ひ切りにて、賣り方に付くべし。極て利運なり。此思切りは、甚だなり惡きものなれ共、其節疑心を生ずべからす。

などあると同一意味に取て宜敷い、殊に市價の放資價格以上とあるは、嘗て自分の買入れた直段以上であるのだから、利得になつて居る場合を意味したので、詰り商内を大事にすべしと云ふ位の意味に過ぎぬ。

何人も、利潤を取る事に依つて、貧とならず。

本邦の諺で云へば、商内は牛の涎とでも譯すべきものであらう。絶へず大取りするより、小取りに掬つて居ても、微塵積れば山となるで、決して貧乏に陷ると云ふやうなことがない、と云つたのである。當り前のことのやうであるが、扨て之を實地に行へと云ふと、遣て居るものは、至つて少ない。少し利でも乘ると、忽ち氣が大きくなつて、相場の名人だと、直ぐ自惚れて、失敗するものが多いのは、遺憾である。

恐慌の來るは、青天の霹靂の如し。

此句も、文字通りで別段解釋する必要はない。恐慌といふものは、張り詰めた人氣が、一時に轉換するのだから、恰も青天の霹靂の如く、非常に迅速である。相場の方で云つても、上げ相場で、一ヶ月乃至數ヶ月を

經て上つた相場も、下落する場合には、十數日にして上げた相場丈け、すぐに下げて仕舞ふ。株式で見るに、日露間開戰ノ、て、皇軍の勝ち出してから、即ち三十七年二月頃からソロ〳〵上げ出し、一高一低はあつたが、三十九年を景氣で押通ふして、四十年一月十七日に至つて、始めて沸騰點に達した。其相場が下落し出すと、一月下旬から二月、三月から五月になつて、上げた丈け下げて、四十一年の五月に至つて、下げ止まつて居る。三年掛つて上たのが、一年も經たない内に、上げた時より以上、下がつて居る。本邦では歐米のやうな激しい恐慌はなかつたが、去る二十三年のことであつた。前年米作の不作と、生糸の不賣とで、一般の融通が惡るくなつた處へ、或る新聞が第一銀行の損失したことを書くと、夫れが一般の人々に針小棒大に感ぜられて、忽ち取付けが始まつた。三井にも波及しさうになつたのを、當時の日本銀行總裁川田男が、銀行の全力を注いで救濟すると云ふ決心を見せたので、恐慌を惹き起さずに沈靜した。去る三十三年に於ける大坂の諸銀行の取附騷ぎ、四十一年の淺草銀行、宮城屋銀行、横濱の左右田銀行の取附騷ぎは、何れも針小のことが棒大に吹聽されて、青天霹靂的に起つて居る。

汝の爲さんと欲する所は、之を爲し終る迄、人に語る事勿れ。(コンモドーア、サアンダービルド)

總て事を成し遂ぐる迄秘密にしなければ、人に先んじられて仕舞ふの例は少くない。今より四十餘年前のことでもあつたらうと思ふ。甲州の若尾逸平氏が、未だ素寒貧の稼人であつた頃、横濱へ出て行く途中、某所で一泊した時、隣室で横濱で生糸が賣れると話して居つたのを聽いて、直ちに國へ引き返し、生糸一駄を横濱へ持つて行つた。處が話よりかまだ高値に買ふて呉れた。其金で綿を買つたら、馬に十五駄程あつた。甲州で一駄の綿を作るに、ドレ程の生産費を要するかと云ふに、少ない高

でない。而して生糸の方は、其割でないから、氏は初て外國貿易、即ち有無相通ずることの大切なるを知覺して、ソレから生糸貿易に從事して。巨利を博したとか云ふことだが、壁に耳あり。油斷は實に大敵である。況んや歐米の如く、大相場師乃至大資産家が、自分の仕事の計畫を人に漏せば、直ちに先き廻りされて、買はれて仕舞ふ。本邦でも五千乃至一萬の商内をする人が、其目的を明かに知らせたならば、屹度邪魔されるに違ひないから、「ヴアンダ、ビルド」の如き大富豪としては、當然言ふべきことである。

何人も見込は百發百中せず。唯當る事外るゝより多きは、是れ成功者なり。

神樣でない以上、自己の見込みが百發百中すると云ふことは、迚も出來る譯のものでない。唯當る事が外るより多き人は、先づ成功者の方である

といふのである。越中の米相場師で、志摩長と云ふ人がある。少年の頃は、天秤棒を擔いで、米の行商をやつたが、何かの端からか取り付いて、高岡で仲買人となつて、定期相場を試み出し、二十五六年の頃から三十一年頃までは、賣つても、買つても、不成功に終つたことがなく、北國米商の覇王とまで稱せられたのだが、一朝時運が非になると、一年か二年の間に、六七十萬圓もあつた資産の過半を傾けた。松辰氏なども、僅か千圓か二千圓の元資で、相場を仕掛たのは、十二三年前のことであらうと思ふ。氏が東京で立身する積りで、仲買を出だす元資として、持つて來た四十萬圓ばかりの金を、日露戰爭前の暴落で、大半損毛に歸して仕舞ふたのが、戰爭後株式の下落時代に際して、飽迄賣方針を立てたのと、米で數回儲けたのとで、二百萬圓計りの資産を造つて、相場師の足を洗ふと迄決心し、身を横濱米穀取引所の理事に置き、軈て理事長となつて、社會に立うとした迄はよかつたが、二三の惡友に煽動されて、斷

然止めたと宣言した其舌の根の未だ乾かぬ中に、米へ手を出し、無理と知りながら、やつて抜けやうとしたのが運の盡きで、二百萬圓餘の資産の大半を消耗し。褒美は社會の物笑ひのみであつた。コンナ譯合で、相場は外るゝ事が少なくても、産を敗ることがあるから、何處までも、慢は損を招き、謙は益を受くるの心掛けが肝要である。

投機の初めは、即ち確實の終なり。

投機其物が、讀んで字の如しであるから、一度投機する以上は、其時既に確實と云ふことはなくなつたものと見て宜ろしい。大膽に商内するがよいと云ふ意味であるが、併し投機と云ふ意味を廣義に解釋すると、何れの商買でも投機でないものはなく、如何なる確實なる商賣だからと云つて、倒産のないと云ふことは出來ぬ。綿糸にせよ、砂糖にせよ、着實な商買のやうであつても、其實株式の商買より危險なことが多い。株式の商賣は、恐慌の起つた場合でも、抜き差しが出來るが、綿糸や砂糖のやうな品物を買つたのでは、暴落の場合、投げ賣りも出來なくて、看す看す大損をするとが多い。何れの商買にも、絶體的確實といふ仕事は、一つも無い筈だ。擔保を取つての高利貸は、一見是れ位確實なものはないやうたが、擔保品の時價が半分にも三分一にもなれば、貸し倒れが出來る。此句の意味は、投機すると云ふ以上は、因循姑息な考では行かぬ。一度考へ付いたなら、大勇猛心を以て事に當るが肝要であると云ふ位に取つて居たら宜からう。

有價證券に付いて、無考へに自已の意見を吐く勿れ。一言の微もことに大害あり。

株式なり有價證券なりに就て、見込みを人に聞れても、無考へに自已の意見を吐くものでない。高いとか安いとか云つた其一言の爲めに、自分

の掛引の大なる妨げを爲すこともあれば、又他人が自分の言つた說を信じて、商內した爲めに、損をさせることもある。全然意見を吐くなと云ふのではないが、よく內情を調べて、强弱の見解が、確と立つた場合に云ふが宜しい。

實價は、結局勝を制す。

實價が結局勝を制すると云ふことには、何人も異論のあらう筈なく、彼是の講釋を要せぬやうであるが、扨て此實價を知ることが、至つて六ケ敷しい。唯だ會社の配當率が宜つたからとて、必しも實價があると言はれず。如何に積立金ばかり多くとも、事業の性質が面白くなければ、是れ亦實價があると言はれぬ。今日大層利益のある仕事でも、行末の見込が少ないものもあれば、東鐵の仕事の如く、現在は餘り香ばしくないやうでも、將來に絕大の樂みがあるものもあるから、先づ放資する前に、充

分注意して、實價のあるものを撰擇するのが肝要である。從て呼價に拘泥して、其足取を見たり、氣味を計つたりして、商內するよりか、實價の結局勝利に歸する理合を考へて、十分手堅く商內した方が、屹度成功する。故諸戶淸六氏嘗て言ひらく。

多くの人は株を商內するのに、單に目前の差利を得やうとのみ務むるから、夫れで失敗するのぢや。即ち相場をして儲ける氣だから儲からぬのだ。僕は株式を以て一つの代物と心得て居る。呉服物なり、材木類なりの代物と同樣に考へて、實價より安いと信じて買たものは、屹度引取るから、代物が思ふやうな直を出す迄は持つて居る。賣る時も、實價より高いと思つた時に賣つて、屹度渡して遣るのだ。株式商だからとて、呉服商や材木商と何の異なる所があらうぞ。唯普通の人は、一種異つた商賣の樣に思ふて、少しの元資で、一擧に大利を得やうとするから、失敗するものが多いのだと。

諸戸氏の如きは、よく實價の結局勝を制する所以の格言を會得した人と云つて宜しい。去ればこそ一代に數百萬圓の資産家となつたのである。

實價の結局勝を制した面白い話が、拙著『投機新論』にある。

糸平の買占め　平三郎の違約處分

明治七年は、佐賀の兵亂に次で、アノ臺灣征伐だ。維新以來、國是は既に定まつて居るとは云ふものゝ、人心は兎もすれば悒々として穩かでない。米價も亦其結果として、八圓二十二錢の高直を出した位であつたが、先づ無事に八年を迎へた。其年は士族の家祿を奉還されたので、士族中には公債を賣つて商買を營んだり。銀行を起したり。投機を試みたりしたが爲め、世間は一時ながら景氣を出した。糸平は、此景氣に乘じて、期米を買ひ出した。上景氣の相場が、上鞘になるのは當然であるから、採算に拔目のない上清は、此時力のあらん限り賣込んだ。如何さま當時の狀況を見るに、景氣なのは獨り都會ばかりで、地方は米納より金納に變した影響が次第に現はれて、一石貳圓臺の相場となり、三重茨城地方では、農民の一揆が起つた位であるのに、獨り東京の米が七圓臺にあらう筈がないから、糸平も大に苦み、百計竭きて、七月限りを受取ることが出來ない爲めに、糸平の機關仲買たる田中平三郎は、違約處分を受くるに至つた。

糸平の亂暴

亂暴の内に器量あり

スルト糸平だ。中々承知しない。ソレモ其筈、糸平の頭には、定期賣買は受渡するものでない。受渡するのは變則である。相場に勝てば、見込に當つたのだ。負ければ泣くとか、貰ふとかすれば好い。對手方も泣かれて見れば、承知するが定期道の德義であると、コウ染み込んで居つたから、分らないではないか。酒を飲んで米商會所の二階へ押掛け、無法にも違約處分を威力で取消さうとした。其權幕が恐ろしいので、重役の米倉、川上抔は皆逃げ出した。糸平は、重役室の卓上で、

小便をして亂暴した。今から考へて見ると、ホンに嘘のやうだが、これが當時に於ける賣買者の狀態であつた。糸平は斯く亂暴して、重役に恥辱を與へて見たやうなものゝ、流石本心に咎めたものと見えて、翌三十日第一銀行へ行つて、澁澤に金策のことを話した。澁澤もあれ程の人たから、糸平の依頼を承諾して、直ちに十萬圓を支出した。今日ならば、十萬圓ばかりの金は、ナンでもない。少し繰り廻はしの上手な仲買人などですら、數十萬圓を運轉して居る位のものだが、當時にあつて、無擔保で十萬圓からの大金を即座に借ることは、糸平でなければ出來ず、又澁澤でなければ貸すことが出來ぬとして、實業界の美談となつた。十萬圓で、七月限りは愈々受取ることになつた。其頃違約處分と云つても、今日のやうに監督官廳の監督が嚴重でないから、重役の匙加減で、ドウにも爲つたから、田中平三郎の違約處分も取消された。八月の新市は、この勢ひで、七十錢高に放れたけれども、人爲は到底大勢に抗することは出來ない。ノミならず高直になればなる丈け、上清なんどが喜んで賣り込むので、相場は五圓臺より再び四圓臺に割込んで、最早糸平の玉も、明日死ぬか、明後日死ぬか、ドウセ死なねばならぬと、市場で指を屈して討死の日を算ふる程になつた。内實も市場の觀察に違はなかつたのだ。ソコデ流石糸平とも云はるゝ入物だから、忽ち一工夫を案じ出した。

已れが死ねば政府も死ぬ　糸平の葬式仕度

糸平は大藏省へ出頭し、大藏卿たる大隈伯に面會して、何んと云ふかと思ふと、イキなり田中は倒れ升。平八は窮死の場合です。併しこの田中が倒るれば、大藏省も倒れ升。平八が討死すれば、國家も討ち死にしますと持ち出したそうだ。色々譯を聽て見ると、當時の大藏省は米價の下落を非常に苦痛として居つたのだから、田中の頼みも無理のない處から、大隈伯は直ちに買上げ資金として三十萬圓を支出するか

ら、甘く米價を維持して呉れと頼んだそうな。糸平は先方の氣を早くも呑込んだから、中々承知しない。三十萬圓と限られたでは、米價を一日も維持すること覺束ない。無數に買ふ氣にならなければ駄目だ。其掛引は、不肖田中に委任されたしと述べて、到頭承諾を得た。大藏省から歸るや否や、家人に市中の白張提灯を有る丈け買つて來いと命じた。白張提灯は、葬式に用ゆる品物で、今蛎殼町では、主人の玉が今日死ぬか、明日死ぬかと算へて居る矢先き、ドウいふ積りか白張提灯などは、餘り緣喜でもないと思ふたけれども、主人の命令だから、否む事も出來ず、澤山買ふて來た。スルト糸平は、數十の白張提灯に、大藏省米穀買入所と認めて、先づ之を三井物産に掲げしめ、自身は數十の白張提灯に護衛されて、蛎殼町へ乘り込んだ。何事かと近いて見ると、前記の始末だから、人氣は忽ち一變した。大藏省で無數に買上げられては、溜るものでないと、相場は連日昇騰の一方であつた。糸平は當に白張提灯を蛎殼町に掲げたばかりでなく、その歳は關東が非常な豊作で、至る處出穀が多いので、上清の約束した買附米が、非常に多いので、人を各地に遣はし、四ッ辻毎に大藏省米穀買上所三井物産田中平八と記した提灯を點けさせたので、これを見た人々は、大に驚き、米穀は末は必らず騰貴するものと信じて、上清に約束した青田の如きも、續々破談者を生じ來りしと同時に、定期も遂に七圓臺に吹き出したと云ふので、流石の上清も大に閉口し、遂に解合ふの止むを得ざるに至つた。之れが糸平一代中に上清に勝つた一度の戰である。

天定つて人に勝つ

サアコヽだ、後進の爲めに十分に注意して置き度いのは、人爲の大勢に勝てぬと云ふことだ。所謂天定まつて人に勝つと云ふが如く、惡事をして如何に榮へても、遂には亡ぶ。人爲で如何に相場に勝つても、失れはキンの一時的のことで、永く維持することが出來るものではな

い。糸平は政府の援助を得て相場を釣り上げ、上清の如き實業家を苦しめたが、併し相場は、政府の力でも如何ともすること出來ず。一時七圓臺に沸騰した相場は、ヂリヂリ下落して元の五圓臺になつてしまつた。《後略》

大不景氣の後、急激の上進は、必らず常に或る特種の事件か、或は操（マニピュレーション）に基因す。

經濟界が大不景に陷つて、商業の沈滯する時期にあつては、物品の荷動きが少なくなるから、何れの事業も、收益が減少する、この場合に、株式の急激なる上進は、ドウしても許さぬはづであるにも拘らず、急激に騰貴すると云ふやうな事があつたならば、其間何等か特殊の事情が伏在して居るのでなければ、一部相場師連の操に出でたものと見て、賣向つた方がよいと云ふことである。

この語句の意味に當嵌めて、妙な例は少なくなからうが、昨年四十二年）九月に於ける株式市場の活動上進の如きは、稍々近いものであらう。一般經濟界は、三十九年から四十年度の恐慌を受け、四十一年二年度に掛け、政府の財政や民間の事業も、着々整理の緒に付きつゝあつたので、財界が順調に向つて居ると稱して宜しいのであるから、株式の下落すべき道理はなかつたであらうが、世間尚ほ沈滯時期で、商工業會社の利益未だ增進せず、諸株の急激なる上進を見るべき程度になつて居らなかつた。然るに市場の目切り活動した內情如何といふに東鐵株が愈々市有として買收されると云ふ見越しで、二三思惑者の同株を買出して、相場を釣り上げたのが一ッの動機で、他の株を上進せしめた。又他方には、東株に拂込運動を試みたるものもあつて、同株を煽つた爲めに、他株も一時好景氣を呈したけれど、元來東鐵も東株も、相場師の操りに原因したのに過ぎなかつたから、乃ち大不景氣後の急激なる上進であつたから、

之が反動は十一月から十二月に渉つての不況沈靜となつた。これが先づ好箇の適例である。

善き放資は、即ち善き投機なり

句の意味は善き代物を撰んで之に投資するは、必勝の投機法であると云ふことで、如何にも尤千萬の次第で、大勢を達觀する明ばりあつても、株式其ものゝ撰擇が面白くないと、思ひも寄らぬ損をする。日本は島帝國だから、航海業は發達せねばならぬものと見込んで、汽船株に着目したとする。處が郵船會社の株主になつて居つた人は、多年の間一定の配當を享けて、安全確實に資産を增進して來て居るけれども、東洋滊船の株主となつた人は、ドウであつたかと云ふと、郵船株と同じやうに一割貳分の配當を貰つたこともあるが、役員の處置の惡かつた爲め、折角受けた配當も、純粹の利益でなく、所謂「タコ」勘定で、會社の內部には、

何時の間にか缺陷が出來て、今では資産と負債とを差引すると、殆んど零となつて會社の存立して居るのが、不思議位のものであるが、これを解散して見た處で、株主は一文にもならないから、泣く泣く繕縫の整理法に我慢をして居るのである。同じ滊船株でも代物の撰擇しやうが惡いと、斯の通り、一方の株主は十年間に巨資を得たのに反して、他の株主は元資も子も失ふ樣になるから、投機で成功しやうとするには、最初に必勝の見込を立てゝ掛らなければならず、其見込を遂げるのには、善きものを撰ばねばならぬ。善き代物を撰んでさへ置けば、自已は少しも心配せずに、他の立派な人に働いて貰つて、知らぬ間に大金持になることが出來る。其最も適切な例は、日本銀行株である、明治十六年の創業當時は、株式思想が至つて幼稚であつたから、同株所有の希望者至つて少なく、有體に云へば、厭やがる華族や、富豪を無理に勸誘して持たせた位のものであつた。その株がドンナ利殖をしたかと云へば、二十年に增

資して倍額の資本となり、增資の拂込金は、悉皆積立金からされたのであるから、株主は二百圓拂込の株券を五年目には只で一株貰つたやうなものだ。其株券が又今日に至つて增資する機運となつて、倍額にされて、一株に一株を貰ふことゝなつた。今度の場合も、其拂込金は、國債を賣つた利益で出來て、二千七八百萬圓もある。積立金へは一文も手を付けんで出來た。加之創業以降、株主は絶へず一割の配當に、二分の特別配當を受けて來て、一回も增減を見たことがないから、創立當初二百圓を投じて、一株の株主となつてさへ居れば、今日は四株の株主で、二千四百圓(增資後も六百圓として)の資產家となり、外にこの期間に得た配當金を五分の復利法で積算すると、千九百餘萬圓となるから、合計四千餘圓を得ることゝなる。又東京株式取引所は、明治十一年六月一日の開業であつて、當時の資本は二十萬圓であつた。二十六年に三十萬圓となり、二十八年に六十萬圓となり、次で百二十萬圓となり、三十九年には四百萬圓となり、四十年に千二百萬圓となつたのであるから、當初一株を持つた人は、今日拾株の株主となつて、數千圓の利益を得て居ることになる。何んと善き放資は、善き投機ではあるまいか。

愚人喋々する時は、沈默せよ。

老子も『言ふ者は知らず、知る者は言はず』といはれたが、兎角譯の分らぬ愚人に限つて、理窟を並べたがるもので。斯ういふ手合は、いよいよの場合に臨みて、動きの取れぬ實事が、鼻の先にブツ付からねば、何程言つて聽かせたからとて、眼が醒めぬものであるから、喋舌るだけ勝手に喋舌らせて、取合はぬがよい。

文祿征韓の役、明より大軍を繰出して、朝鮮を援くる風聞あり。時に我軍は、京城を本據として居つたが、踏み怺えて守るには、地廣くして兵寡く、去りとて之を棄てんとすれば、諸將いづれも强がりのみ言つて、

守るとも棄つるとも定らず、毎日相談ばかりして居つたが、小早川隆景は、病氣だといつて出席しない。其中に明軍いよ〳〵押寄せ來るとの偵報、櫛の齒を挽くが如く、味方何となく色めき立つ樣子に、奉行等棄置かれず、隆景の許へ、出席の催促數度に及んだけれども、未だ快氣せぬといつて、如何しても出て來ぬ。其處で奉行の內一二人隆景を尋ねて、意見を聽くと、兎角各方の御分別に過ぎまじ。いづれ快氣次第罷出ると、不得要領の挨拶にお茶を濁ごし、是非の義を言はぬ。隆景の了簡では、諸將心にもなき强みを裝ひ、兵粮なくば、石を食つてなりと、此都を持詰めん抔と、口から出任せの事をいふとも、事極りなば、替るべく。其事の極まりといふは、此頃諸軍の兵粮を積りみるに、今十日を支える程しか無い。兵粮のある間こそ、强がりをいへ。兵粮盡きては、人間石を食し土を食しては居られぬものなり。上方者の浮氣な事いふものには、先づ成るだけ言はせて置き、切迫極つたとき、道理を說き聽せたなら、評議立ところに落着しようとて、扨こそ病氣と稱して、諸軍の兵粮盡くるを待受けたのであるが、早や時分は好し、迎ひのもの見ゆる頃ぞと待設けて居る處へ、又小早川殿出てられ候へと、使者引きも切らず。隆景ヤッと氣分快よくなれりとて、其席へ出る。三奉行始め、諸將口を揃えて、小早川殿聞き給へ、此都を持悐えずば、日本の耻なり。武士と生れたからには、一足も此處を引くべきにあらずと、何れも存ずるにつき、此程よりの評議落着せず、思召は如何に承りたしといふ。隆景聞いて、某の所存は、左樣にては之なし。其仔細は第一に、都の內廣きことなれば、日本の人衆にて、多勢を引受け防ぐこと、成るべからず。第二に、日本勢この都にて討死しても、後來日本の御爲になるべき事にあらず。第三に、諸軍の兵粮、大方早や盡きなん。頭立ちたるものは、義理を思ふて堪忍あるべけれど、下々は食物なくては、一日も我慢出來るものにあらず。たとへ五日六日は、我慢すると言ふも、働きの用に立たんこと

覺束なし。此程より、各方は石を食つても、都を持詰めると仰せらるゝと承る。必定その御覺悟なるや、事極らぬ内は、誰れも口にては申すものなれど、眞に極りたるとき、石を食つては堪忍ならぬものなれば、其御分別は違ひ申さん。某は石を食つて堪忍する義、罷成らず。今の處にては、先づ此都に火を放ち、燒拂つて引取り、後日の軍を專一にすること然るべし。此都にて、日本勢餓死しても、又刺し違へて死んでも、詮なしと述ぶれば、諸將口の先では、强みをいふものゝ、內實は兵粮の盡きたるに閉口し、誰なり思切つて此都を引けと言へかし、其尾に付かんと思ひ居る矢先、隆景の陳述があつたので、評議直ちに一決し、去らば明朝陣拂ひすべしとて、各座を立たうとした。時に隆景改めて、此程より是非此都を持詰むべしと申されたる人々の、仔細なく此都を引取らるべしと思はるゝは不覺なり。明の大軍押寄すると知りて、徒らに退く時は、逃げたるに當るべし。是非此處は、一合戰致さでは叶はぬ處なり、

合戰致さゞれば、敵に突立てられて、大勢退き難からん。先刻より各の御氣色をも憚らず、推參を申し過ごしたる間、明日の合戰は、某引受け申すべく、其間に人數を繰引せられよ。明日の合戰勝利ならば、日本の總勝なり。勝利なき時は、日本の總負たらん。隨分一ト合戰すべしといつて、翌日の戰に、隆景目醒しく奮戰して明の大軍を打破り、所謂碧蹄館の大捷を得た。

當時、征韓の諸將は、いづれも塲數功者の老兵で、何も愚人といふ譯ではない。夫ですら、事が極らぬ內は、要でもない長評議に、下らぬ理窟を喋舌り立てゝ、隆景の如き智者に、虛病を構へさせた。其處を考へると、市塲で、塲立や、小僧や、來客筋などが、高いとか安いとか、夢中になつて喋舌り廻るときには、何も言はず、沈默して居るが、賢こい仕方と申すものだ。

明治四十三年六月廿二日印刷
明治四十三年六月廿五日發行

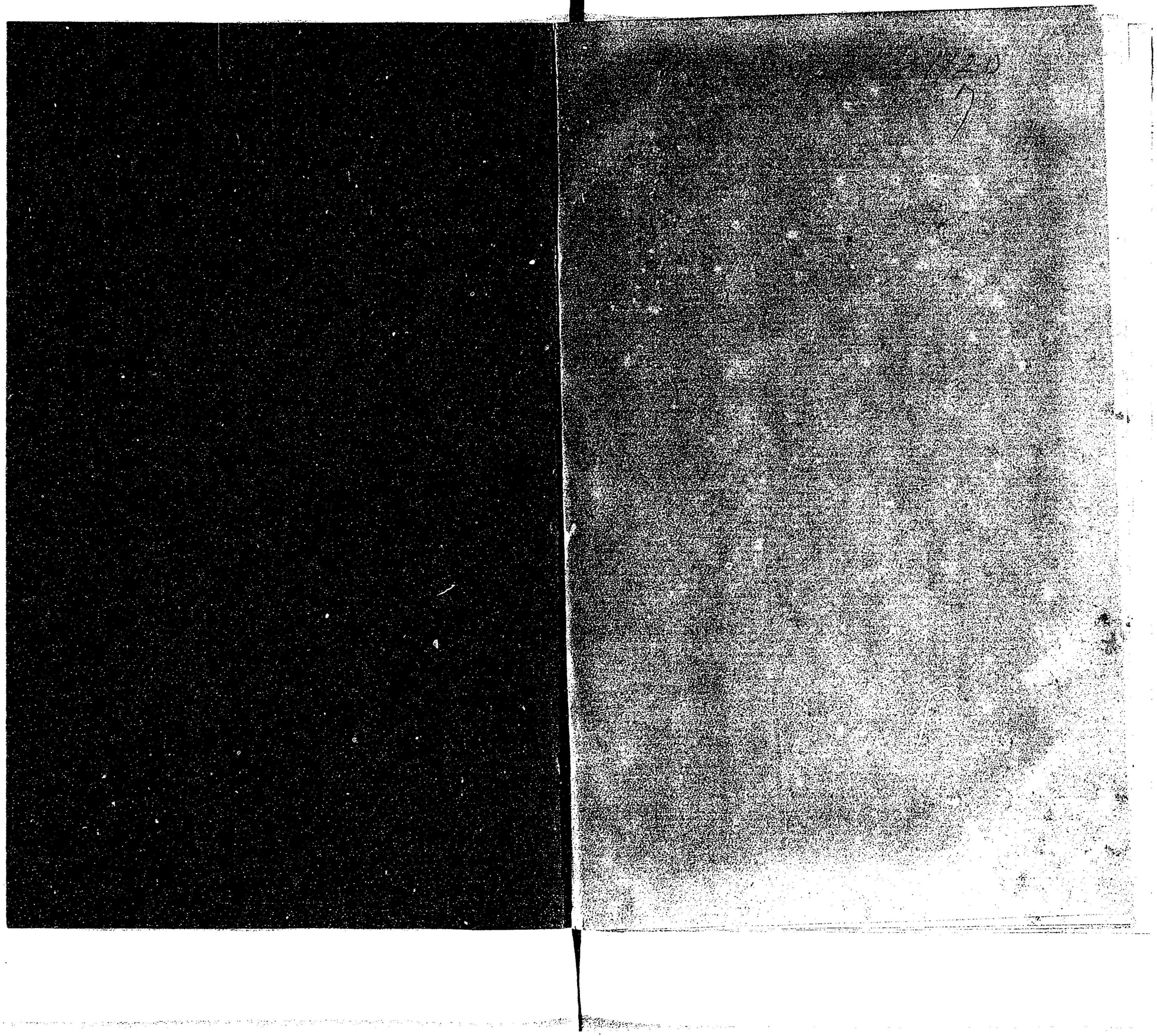
著作兼發行者　野城久吉　東京市京橋區日吉町四番地

印刷者　渡邊爲藏　東京市京橋區日吉町十番地

印刷所　民友社印刷部

發行所　民友社出版部　東京市京橋區日吉町四番地

不許複製



043980-000-4

328-294

商機

野城　久吉／著

M43

BDM-0093